

パスカルの《アポロジ》の プラン復元に関して (XXI)

竹 下 春 日

《序 論》

われわれは XVI 回において、既分類断章群 (Classé) と未分類断章群 (Non classé) とを総合することによって、パスカルの《アポロジ》のプランの復元を試みた。即ち《アポロジ》を構成すべき各章に、全断章 (C. + N. c.) を分類配置した。しかしこれは、形式的配分にとどまっていたゆえ、各章の内部構成は依然不明のままであった。従ってわれわれは出来る限り各章内部の構成を明らかにすることに努め度い。この作業は事実上、各章の解説を意味するものであるから、有意義であると見做し得よう。

しかし以上に対し、次の異論がありうるであろう——「《アポロジ》のプラン復元を志向するならば、たんに解説に留まらず、各章中に配置された諸断章の配列をも推理決定するのでなければ、不徹底であろう」と。

[1] この反論は、一応正しいものと言いうるが、しかしこれは理想論にすぎない。われわれが《アポロジ》の各章を構成すべき断章の順序を厳密に決定することは、事実上不可能である。この困難は、パスカルの脳裏に存した fr. (断章) の順序を推定しえないことに存するからではなく、パスカル自身かかる順序を決めておらなかったからである。この理由は、次の如くである。彼パスカルが全断章の順序そのものを、その脳中に収めていたとする仮定は、これを是認することが出来ないからである。もし彼が全断章 (C. + N. c.) を記憶しうる程の記憶力を有していたとするならば、タイトルの順序を示す番号を附する必要は無かったであろう。然るに fr. La. 459-Br. 289 (N. c.) の《証拠》を

示す断章には、12個の番号が施されておるのである（Ⅶ回、p. 57参照）。更にまた、もしN. c. のすべての配属が決定されていたとするならば、未分類のものは尽く分類されて、liasses（分類綴）のうちに収められていたことであろう。即ち300個を越えるN. c. が、リヤス外に残されることは、無かったであろう。したがって各断章の厳密な順序は、決定されていなかったと、見るべきである。然しパスカルは一定のプランに従って、下書を作製しつつあったのであり、したがって各章中の内部構成を、或る程度推察することは可能である。

〔Ⅱ〕ところで各断章間の順序推定の困難さは、さらに別の点にも存する。われわれが各章における主旨を中心とする内部構造を把握しえたとしても、この事は直ちにパスカルの意図していた形式的順序を推定しうる手掛りとは、なり得ないということである。一般に、思想内容の把握理解と、その表現形式としての配置順序とは、別物である。われわれが復元において為しうるのは、大抵の場合前者のみで、後者（順序）を推測決定することは、決して容易ではない。例えば、(一)——AはBである。それゆえ結論はCである、とする論述内容は、(二)——結論はCである。何故ならAはBであるから、という形式（順序）も可能であって、非常に多くの場合、パスカルが何れの順序を採用したであろうかを推定することは、實際上われわれにとって極めて困難である。

〔Ⅲ〕最後に、パスカルの推論形式が演繹か帰納かの判別も、事実上不可能ではないにせよ、甚だしく困難である。而も〔Ⅱ〕と〔Ⅲ〕の事情が加重するとき、おのおのの断章順序の推定は、不可能に近いと言わざるを得ないのである。

〔Ⅳ〕それ故われわれは、各章の主旨ないし内部構造を把握することに努め、その際おのずから浮び上る断章間の順序を、可能な限り考慮することにし度い。

《第1部序言》

この《序言》は、内容上二つの部分に分かれる——〔Ⅰ〕主たる部分は、La. 29-Br. 60で、《第1部。神なき人間の惨めさ。》及び《第1部。自然（本性）が腐敗していること。自然（本性）そのものによって。》の二者が見出される。このうちパスカルが、いずれの表題を採用する予定であったか、不明であるが、

何れにせよ、内容上は大差あるものではない。なぜなら、《神なき人間の惨めさ》Misère de l'homme sans Dieu とは、アダムの神への反逆に由来するものであり、この反逆そのもの（原罪）が、人間本性の《腐敗せる》corrompue ことを、根源的に意味しているからである。

〔Ⅱ〕 La. 48-Br. 62 (32) は、パスカル自身の叙述方法を、読者に対し納得させるために提示した部分である。パスカルの《アポロジ》は、内容上当然乍ら学術的、少くとも神学的著作であると、世人に解されることを予想したパスカルにとって、この補足的部分は有意義であったと言えよう。なぜなら当時一般に学術的著作は、固苦しいのが普通であったからである。彼パスカルは、シャロンやトマス・アクイナス (La. 47-Br. 61 (35)) の論述の仕方を否定し、モンテーニュの叙述方法を評価しているが、モンテーニュの叙述の仕方を採用することによって生ずる誤解を避けるため、モンテーニュ自身の思想そのものに対しては、極めて批判的である。それゆえわれわれは、この区別に対して、十分留意せねばならないのである。

1°《順序》

〔Ⅰ〕 分類断章群 (Classé) の部分。

1°章中の Classé の部分は、すべてパスカルの《Apologie》の下書きである『パンセ』Pensées の構成全体にかんする見取図としての略図である。したがってこれは、下書の下書というべきものであり、大規模な構想を展開するに際して、当然必要となるべきものである。プランが小規模の場合は、直ぐさま本格的執筆ないし直接の下書に着手しうるが、プランが長大のものである場合は、直接の下書の基礎となるべき第二次的下書（われわれの所謂見取図）が必要となることは、われわれ自身の経験に徴して、見易い事柄である。パスカルにとっても、プラン全体の構成が先づなによりも最大の関心事と成ったことは、極めて自然であったと、言い得る。而してこのことを証するものは、本章に於ける各断章の他の章 (chapitres) への所属関係を示す、他章中の fr. との密接なる連関ないし対応一致である。

先ず Lafuma の断章番号の順序に従って、Classé の fr. を検討して行き度い。

(一) La. 24-Br. 596 について——これは、《イエス・キリスト》と《マホメット》との差異・優劣にかくするもので、16°(16°) 《他宗教の虚偽》〔カッコ中の番号は Lafuma によるもの。以下同様〕中の La. 398-Br. 592, La. 403-Br. 599 と関連照応している。

(二) La. 25-Br. 227 について——この断章は、不安と懐疑の主観的吐露が表現されているが、これらはパスカルの所謂《人間の状態》condition de l'homme (La. 61-Br. 127) を示すものであるからして、La. 61 の所属する 2°(2°) 《空しさ》の章に関係していることが、分る。

(三) La. 26-Br. 227 について——これは、《空》や《鳥》による神の証明方法が、《大多数の人たち》にとっては適切ではないことを、内容とするものであるが、これは La. 19-Br. 243 と同主旨であり、23°(14°) 《この神の証明法の卓越性》中の La. 381-Br. 543 に述べられている《神の形而上学的証拠》の一例と見られる。したがって La. 26 は、23°章に対応していると、言いうるのである。

(四) La. 27-Br. 184 について——この fr. は、哲学者や懐疑論者また独断論者たちにも、神を捜し求めるように仕向けることを、その主旨としている。ところで同主旨と密接な関係を持った諸断章が、15°(9°) 《哲学者たち》の章中に見出されるので、La. 27 が同章と連関することは、疑いえない。

(五) La. 28-Br. 247 について——この断章は、信仰・宗教への誘導方法としての《機械》machine (身体) の習慣的調整を説くものであるが、この fr. は La. 7-Br. 252 および La. 396-Br. 245 と内容的に連関している。而して後者の二断章は、18°(13°) 《理性の服従と利用》中に属すべきものであるから (XIV 回の(7)参照), La. 28 は18°の章に対応しておると、言いうる。

(六) La. 29-Br. 60 について——この断章は、《第1部》と《第2部》の内容区分にかんするもので、叙上の「下書の下書」という性格を代表するものである。記述は、それぞれ《第1部》・《第2部》の要旨を示すものであり、タイトル的性格を持っている。したがって Non classé の La. 48-Br. 62 (第1部序言) および La. 49-Br. 242 (第2部序言) を、内容上説明ないし補足するものと見做しうる。

(七) La. 30-Br248 について——この fr. は、《信仰》・《証拠》・《機械》の三者にかんするものであり、要旨において既出(五)の La. 28・La. 7・La. 396 (195)と連関している。それゆえ La. 30 は、18°章の内容を志向していると、推定しうる。

(八) La. 31-Br. 602 について——これはユダヤ人の特徴にかんするものであり、内容的に Non classé の La. 552-Br. 620 につながりを持つことは、明らかである。而して La. 552 は21°《永続性》にぞくすべきものであるから (XV 回の (261) 参照), La. 31 も21°章と対応的關係を持っておると、言いうる。

(九) La. 32-Br. 291 について——この断章は La. 88-Br. 293・154 の叙述内容と一致しているが、後者は2°(12°)《空しさ》中のものであるから、当然 La. 32 は2°章に連関している。

(十) La. 33-Br. 167 について——この断章は、次の如くである、《人生の惨めさが、すべてこれらのことを生じさせた。それを見た彼らは、氣を紛らすことを取り上げた。》(強調点は論者。以下同様) 内容の上から見て、この断章が4°《気晴らし》の章に照応することは、これを疑いえない。

(十一) La. 34-Br. 246 について——この fr. は《機械》を論ずるものであるから、上出の La. 30・La. 28・La. 7・La. 396 と關係を持つことによって、18°章の叙述と連関している。

(十二) La. 35-Br. 187 について——この断章の説くところは、宗教への教導を主旨とするものであるから、17°《愛すべき宗教》および18°《宗教の基礎と反論への回答》と一致している。特に La. 35 中の《La [la religion] rendre ensuite aimable,》に於ける形容詞は、17°章のタイトルたる《Religion aimable》の形容詞と一致していることは、われわれの推測を裏書きするものである。

〔II〕 非分類断章群 (Non classé) の部分。

既に〔I〕において述べたごとく、Classé は下書の下書という性格を有する fr. から成り立つものである。したがって下書の完成した暁には、下書を構成する諸《章》に編入ないし吸収されるべきものであって、最終的には1°章から姿を消すはずであったと、推定しうるものである。

これに対して、Non classé の諸断章こそは、1°《順序(秩序)》Ordre の章固

有の内容を形成するものである。而してこの内容なるものを分類整理すると、凡そ次の三つに概括することが可能である。

(一) ≪ordre≫(順序・秩序)の本質論としての、≪ordre≫・≪自然≫・≪真理≫の内的関連についての叙述——La. 45-Br. 21 (33) は、自然と真理の關係に触れて、次のごとく述べている、≪順序。／自然はあらゆる真理を、おのおのそれ自身のなかに置いた。それらすべてを、われわれの技巧が、一方を他方のうちへと閉じこめる。しかしそれは不自然である。おのおの真理は自分の場所を占めている。≫

扱て La. 46-Br. 20 (34) および La. 3-Br. 29 (3) は、内容上 La. 45 の詳細化ないし具体例にほかならない。ところで自然と真理の關係は、La. 45 において明らかであるが、≪ordre≫と≪自然≫の連関は必ずしも明瞭ではない。両者の内的關係を暗示するものは、La. 44-Br. 273 (32) である——≪懷疑論。／私はここに私の考えを無秩序に、しかもおそらく無計画な混乱ではないように、書き記そうと思う。それが真の秩序であって、その無秩序さそのものによって、私の目的を常に特徴づけてくれるだろう。／もし私が私の主題を秩序立て取り扱ったとしたら、それに名誉を与えすぎることになるだろう。……≫この fr. では、パスカルの考える≪無秩序≫なるものが反って≪真の秩序≫le véritable ordre であることが、述べられている。そうして主題を≪秩序立って取り扱≫うことが、反って≪それに名誉を与えすぎる≫Je ferais trop d'honneur à mon sujet ことになるのである。ところでこの≪名誉を与えすぎる≫ことが、La. 45 中の≪不自然≫n'est pas naturel ないし≪技巧≫art の場合に相当するものであることは、パスカルの言わんとするその主旨から見て、明らかである。それ故われわれは、パスカルの所謂≪真の秩序≫とは、不自然の反対物すなわち≪自然的なる≫naturel ものであると、言いうるのである。かくしてわれわれは、≪ordre≫なるものが、本質上≪自然≫と内面的につながり、従っておのずから≪真理≫と関連するのである (La. 45)。≪真の秩序≫における≪真の≫véritable という語は、まさにこの事を示すものである。要するに、パスカルの説く≪ordre≫とは、それが≪真の≫ものである限り、≪naturel≫であり、人為的強制的なる≪技巧≫を排するものであると、言いうるのである。これに対

し、技巧的な「ordre」は「不自然」であり、「véritable」なるものではないのである。以上が、パスカルの説く「ordre」であって、これは二つに区分することが、可能である。

(二) 外的秩序（順序）としての「ordre」——外的なる「ordre」とは、題材・言葉・論述等の「配置」disposition にかんするものであって、次の諸断章がこれらに触れている——La. 4-Br. 22 (4), La. 8-Br. 19 (8), La. 47-Br. 61 (35), La. 42-Br. 449 (30)。

(三) 内的秩序としての「ordre」——これは人間存在の内的状態、その表現としての思想、信仰のあり方、等を意味するものであり、La. 44-Br. 373 (32), La. 36-Br. 241 (24) が、これらについて述べている。La. 36 は、次のごとく説いている——「順序。／私には、キリスト教をほんとうだと信じることによってまちがうよりも、まちがった上で、キリスト教がほんとうであることを発見するほうが、ずっと恐ろしいだろう。」また La. 44 は、「懐疑論」を主題とする論述の仕方である。この内的秩序としての「ordre」を叙述する部分は、僅か二個にすぎないが、これらは全体として「キリスト教」および「懐疑論」にかんする論述を予想せしめるものであり、これらの大規模な詳述・展開・具体化の成果は、——叙述の外的「ordre」の整備拡充と相俟って——「アポロジ」のほぼ全体に相当するものである。

(四) 1°「順序」の章と「アポロジ」の概要について——以上〔I〕及び〔II〕を全般的に顧るとき、われわれは次のごとき「アポロジ」全体の極めて大まかなスケッチを見出すことが、出来る。即ちわれわれは、次のごとき図式によって、これを示しうる（→は、たんなる移行を示すものではなく、加重的段階的充実による変化を示すものである）——「ordre」の本質論（〔II〕の(一)）→外的秩序としての「ordre」（〔II〕の(二)）→内的秩序としての「ordre」（〔II〕の(三)）→1°章中の分類断章群 (Classé) の部分（〔I〕）→「パンセ」→「アポロジ」。

2°「空しさ」

〔I〕 この章中の Classé のうちで、この章全体の主旨を示すものは、次の

五つの断章である——La. 51-Br. 338, La. 53-Br. 161, La. 61-Br. 127, La. 65-Br. 436, La. 73-Br. 164。

扱てこれらのうち、La. 53 は、この世の《空しさ》vanité というものが《明白》visible であることを指摘して、章名の意図を示している。次に La. 61 は、《人間の状態》condition de l'homme としての《不安定 (inconstance), 退屈 (ennui), 不安 (inquiétude)》にかんして述べ、La. 65 は人間の《弱さ》faiblesse について叙している。これら三断章こそは、人間存在の一般的あり方を提示したものであり、La. 51, La. 73 は、それぞれ《空しさ》の対するキリスト者の態度、日常的人間のあり方を、述べたものである。

〔Ⅱ〕 以上五個の fr. が、2°章中の基本的部分を構成するのに対し、それ以外の全断章（2°章中の C. + N. c. ——XVI 回参照）はすべて、上出の主旨を補足するものないしその具体例にすぎない。以下これらの分類を掲示すれば、次の通りである。

(一) 《空しさ》の諸形態——(a)僅かの事によって影響される人間というものの空しさ——(i)僧の頭巾の一切れが、2万5千人の僧を動かすという例 (La. 55-Br. 955)。 (ii)居住地の差異が殺人等の原因となること (La. 57-Br. 292, La. 88-Br. 293・154)。 (iii)わずかのことが慰めの原因となること及びその理由 (La. 80-Br. 136)。 (iv)恋愛の原因と結果 (La. 83-Br. 163, La. 90-Br. 162 (38))。 (v)最高の裁判官の精神も砲音や蠅などによって乱されること (La. 85-Br. 366)。

(b) 知識や学問の空しさ——(i)外的学問の空しさ (La. 60-Br. 67)。 (ii)われわれの知らない沢山の王国があるということ (La. 79-Br. 207)。 (iii)独断論者の理性偏重が創り出す虚構 (La. 89-Br. 388)。 (iv)学問をあまりにも深く究めることの無益 (La. 92-Br. 76 (40))。

(c) 尊敬、名声に係わる空しさ (La. 68-Br. 317 bis, La. 93-Br. 153 (41), La. 95-Br. 333 (43))。

(d) 類似の空しさ——(i)顔の類似について (La. 50-Br. 133)。 (ii)絵と原物の類似 (La. 77-Br. 134)。

(e) 虚栄 (心)・名誉 (心) の空しさ——(i)虚栄 (心) について (La. 94-Br. 150 (42))。

(f) 流転の空しさ——(i)すべての所有物の流転性 (La. 152-Br. 212 (76))。 (ii)時の流転性と、過去・未来への逃避の空しさ (La. 84-Br. 172)。

(g) 職業の選択理由 (慣習に従うところの) の空しさ (La. 72-Br. 117, La. 87-Br. 305)。

(h) 社会的地位の高いということの空しさ (La. 56-Br. 318, La. 67-Br. 320)。この二断章のうち、La. 56については、説明を附加する要がある。この fr. は、《彼は四人の従僕を持っている。》という短断章であるが、これは《民衆の意見の健全さ。》と連関するものと、推定しうる。なぜなら、La. 185-Br. 316 中には、次の叙述が発見されるからである——《民衆の意見の健全さ。／着飾ることは、そんなに空しいことではない。なぜなら、それは大勢の人間が自分のために働いているということを示すことになるからだ。……ところで、人手を多く持っているということは、ただのうわべや、ただの馬具とは話が違ふ。／人手を多く持てば持つほど、それだけその人は強いのである。着飾るということは、自分の力を示すことなのだ。》それゆえ、《四人の従僕を持っている》ことは、《自分の力を示すこと》になるのであって、《ただのうわべ》とは見ない点で、民衆の意見は《健全》saines であると言いうるのである。パスカルは、こうした民衆の意見を一応《健全》として肯定しているが、しかし彼の《背後の思想》は、かかる意見の空しさを見通しているのである——《……民衆の意見は健全であるにしても、民衆がむなしいものであることは相変らずほんとうであることを示さなければならない。なぜなら、民衆は真理をその在る場所において感知せずに、真理の無い場所に真理を置いているので、民衆の意見は常にきわめて誤っており、きわめて不健全であるからである。》(9°《現象の理由》の章中の La. 183-Br. 328)。

(i) 愛の原因の空しさ (La. 74-Br. 158, La. 94-Br. 150 (42))。 (j) 慰戯の空しさ (La. 76-Br. 141)。

(ii) 《不安定 (定めなさ)》の諸形態——(a)境遇の変化 (La. 52-Br. 140)。 (b) 世の中の多様化 (La. 54-Br. 113)。 (c) 両極端の一方へ傾くと、真理から外れたり、有効性を失うという不安定性 (La. 58-Br. 381, La. 78-Br. 69, La. 86-Br. 132)。

(三) 《弱さ》の諸形態——(a)世における偉大なもの・重要なもの・力あるものは、民衆の弱さを基礎にしているということ——(i)民衆の自動的連想作用による被支配性 (La. 62-Br. 308)。(ii)民衆の理性と愚かさ (La. 63-Br. 330)。

(b) 人間の愚かさが、ピュロン派の勢力を維持しているということ (La. 71-Br. 376)。(c)自己自身の弱さについての無知 (La. 70-Br. 374, La. 146-Br. 372 (70))。

以上において、《空しさ》・《不安定 (定めなさ)》・《弱さ》及びこれらの諸形態について、分類が行われているが、これらの区別は事実上相対的なものに過ぎないことを、われわれは忘れてはならないであろう。《不安定》ならびに《弱さ》等は、本質上《空しさ》の諸様相ないし諸変様にほかならないが、これらの間には内面的連関が存在して、決定的かつ厳密なる区分は、成立し難いのが実情であるからである。

3° 《欺瞞的諸勢力》

〔I〕 この章の基本的部分をなすものは、次の四個の断章である——La. 81-Br. 82, La. 82-Br. 83, La. 2-Br. 274 (2), La. 153-Br. 88 (77)。

(一) パスカルは欺瞞的諸勢力として、《想像力》*imagination* (La. 81), 《理性》*raison* (La. 82), 《感覚》*les sens* (La. 82), 《直感》*sentiment* (La. 2), 《思いつき》*fantaisie* (La. 153) の五つを挙げ、各勢力 (*puissance*) の欺瞞的性格とその具体相に触れている。これら欺瞞的勢力中最大のものは、《想像力》であって、パスカルはこれについて多大の筆を費している。

(二) 而して欺瞞的勢力のもたらす誤謬を消し去るものこそ、神の恩恵とするのが、パスカルの言わんとするところである——《人間は、恩恵なしには消しがたい、生来の誤謬 (*erreur, naturelle et ineffaçable sans la grâce*) に満ちた存在でしかない。》(La. 82)。

〔II〕 以上の核心的部分を構成する *Non classé* の fr. を除く他のすべての断章 (この章中の) は、上述の諸勢力主として想像力にかんする叙述の詳細化、具体相の展開、補足的論述にほかならない。少しく詳述するならば、(一)先づ La. 1-Br. 105 (1) は、想像力の《判断》*jugement* への影響について述べたも

のであり、(二) La. 40-Br. 74 (28) および La. 100-Br. 275 (48) は、想像力の効果に関するものである。(三) La. 135-Br. 85 (59) は、La. 136-Br. 102 (60) と関連しており、想像力の働きの二種類とその効果について叙している (XIV 回, p. 64-65 参照)。(四) La. 133-Br. 90・89 (50) は、モンテーニュの『随想録』中の引用句による La. 81 の補足をなすものであるが、(五) La. 168-Br. 118 (89) は、《おもな才能》が《他のすべての才能》を規整するという内容のもので、La. 81 中の《あの誤りと偽りの主》たる想像力にかんする簡潔な言い替えであって、(四)と同様一種の補足的説明と見做しうるものである (XIV 回, p. 72 参照)。(六) La. 169-Br. 147 (90) もまた、想像力の欺瞞性について補いの役をなすものであり、(七)他の N. c. は一切、想像力の働きの具体相・諸状態・実例を提示するものに外ならない。

4° 《気晴らし》

この章中における中心的部分を構成するものは、La. 269-Br. 139 および La. 268-Br. 469 の二断章であり、他の凡ては Classé, Non classé を含めて、この二断章の言わんとするところを、補おうとするものに外ならない。

[I] La. 269 は、《気晴らし》divertissement の本質・由来に触れ、かつその具体的事例を詳しく述べている。気晴らしにかんする重要な記述は、次の文章にも十分窺うことが可能である——《気を紛らすこと [気晴らし]。／……ところがもっと突っこんで考え、われわれのあらゆる不幸の原因を見つけただけでなく、その理由を発見しようとしたところ、私は、まさに有効な理由が一つあることを発見した。それは、弱く、死すべく、そして、われわれがもっと突っこんで考えるときには、われわれを慰めてくれるものは何もないほどに惨めな、われわれの状態の、本来の不幸のうちに存するものである。》また同断章中に、われわれはパスカルの敷いた伏線の一つを、見出すのである——《彼らには、気ばらしと仕事とを外に求めさず、一つのひそかな本能があり、それは彼らの絶えざる惨めさの意識から生じるものである。彼らにはまた、われわれの最初の本性の偉大さのなごりであるいま一つのひそかな本能があり、それが彼らに対して、幸福は事実安息のうちにしかないのであって、激動のなかに

はないということを知らせているのである。……》(La. 269)。

これら二個の引用文に抛り、われわれは《気晴らし》の本質と発生理由を理解しうるのであるが、後者の叙述中の《幸福は事実安息のうちにしかない》ということは、真実の《幸福》・《安息》が、神と結ばれる信仰においてのみ可能であることを、暗示するものである。

〔Ⅱ〕 従ってパスカルが、神の《image》としての《必然的で永遠で無限な存在》un être nécessaire, éternel et infiniなるものを、この章中に出現せしめたのも、当然の事である——《……自然のうちには、必然的で永遠で無限な存在があることを、私はよく知っている。》(La. 268) ところでこの断章は、漸て来たるべき12°章《人間を知ることから神への移行》のうちに現われるであろうかの高名なる fr. La. 390-Br. 72 中の《学識ある者は、自然は自分の姿と創造主の姿 (image) とをあらゆるもののなかに刻み込んだので、それらのものはほとんどすべてその二重の無限性をそこから受けとっていることを理解する。》を予想するものであることを、われわれは附言しておく必要があるであろう。

5°《退屈と人間の本質》

この章中に属する全断章は、内容上そのすべてが重要断章群と称しうるものであって、相互に関連しあう一セットを構成している。

〔Ⅰ〕 主旨の第一は、人間の本質は《動き (運動)》le mouvementにある、ということである。これを述べている fr. は、La. 163-Br. 129 (84) および La. 165-Br. 94 bis (86) である。後者は《人間は、本来、「全くの動物」(omne animal) である。》というもので、この fr. がなぜ《動き》と結びつくのか、一見理解し難いとおもわれるので、少しく補足説明しておき度い。

この断章 (La. 165) は、明らかに次の断章 La. 162-Br. 94 の《人間の本性は全くの自然である。「全くの動物」／どんなものでも自然なものとなされ、どんな自然のものでも、そうでなくされてしまう。》と、関連している。扱て La. 165 により人間——「全くの動物」。また La. 162 に抛り、人間——全くの自然である。それゆえ人間——「全くの動物」——全くの自然となり、《どんな自

然でも、そうでなくされてしまう》(La. 162) 以上、人間は本性上可變的であり、《le mouvement》を、その本質とするものであると、結論しうるのである。

〔Ⅱ〕 かように人間の本質は、《動き》に存するのであるが、《退屈》ennui なるものは、まさにこの《動き》の休止から生ずるのである——La. 160-Br. 131 (81) は、このことを説いている。

〔Ⅲ〕 次にこの《退屈》は、人間に対して自己の《惨めさ》misère の意識をもたらす——La. 160 及び La. 159-Br. 128 は、この事実に触れている。

〔Ⅳ〕 ところで《惨めさ》を感じる人間は、他への《従属》dépendance を本性とする存在であるにもかかわらず、《独立の願ひ》désir d'indépendance を持ち、満されない《窮乏》besoin の状態に陥っている (La. 158-Br. 126)。而してこの《独立の願ひ》こそは、《傲慢》orgueil の本性であり、La. 157-Br. 152, La. 158-Br. 126 の二断章が説くところである。しかしかかる人間存在のあり方は、日常的人間のあり方であり、個々の事物に対する《好奇心》curiosité (La. 157) を抱くこと自体によって、《惨めさ》から逃避しようとするものに外ならない。

以上全体が、この章の大筋であるが、この際パスカルが人間の本来的あり方としての神への《従属》を念頭に置いていることは、言うまでも無いところであらう。

6° 《惨めさ》

〔Ⅰ〕 この章の内容を構成する重要事項は、次の三つである。

(一) 《惨めさ》の原因について——(a)人間の存在状態の多様性・複雑性 (これを説く fr. としては La. 102-Br. 112 がある)。(b)変化性 (La. 103-Br. 111)。(c)個人的社会的心理及び行動の不合理性・無根拠性・不当性 (La. 108-Br. 294, La. 114-Br. 326)。(d)極端へ向う傾向 (La. 101-Br. 429, La. 105-Br. 379)。

(二) 《惨めさ》の諸形態について——《空しさ》vanité (La. 121-Br. 110), 《気晴らし》divertissement・《退屈》ennui (La. 128-Br. 171 (52)), 《定めなさ》inconstance (La. 102-Br. 112), 《不幸》malheur (La. 104-Br. 181),

《弱さ》faiblesse (La. 123-Br. 389)。

La. 123 が何故《弱さ》を説くものであるかについては、2°《空しさ》の章中におけるLa. 65-Br. 436 が手掛りとなる。La. 123 は、その中で次の如く述べている——《……ところで、人は、幸福でありたいと欲し、またなんらかの真理を確保したいと欲する。それなのに、彼は、知ることもできなければ、知ろうと願わないでいることもできない。》この主旨と一致して、《弱さ》のタイトルを有する La. 65 の末尾は、次のごとくである——《われわれは、真理についても、幸福についても、無能力である。》扱って最後に、《欺瞞的諸勢力》puissances trompeuses に支配される人間が《惨め》であることは、言うまでも無い。

以上(二)全体を顧るとき、《惨めさ》が叙上の諸形態を包括するものであり、この形態のうちに既出の諸章の章名が見出されることは、この《惨めさ》misère なる概念が、前出諸章の総括的役割を果すものであって、次に出て来る人間の《偉大さ》grandeur (7°章の章名) の対立概念として、パスカルによって意識的に対置されたものと、言うことができる。

(三) 《惨めさ》と人間のあるべき姿について——主旨の第三番目は、《惨めさ》の認識を契機として、《人は自分自身を知らなければならない。》(La. 120-Br. 66) ということである。従ってパスカルが、《ソロモンとヨブ》について説くのは、当然でなければならない——《惨めさ。／ソロモンとヨブは、人間の惨めさを最もよく知り、最もよく語った人である。前者は、最も幸福な人。後者は最も不幸な人。前者は体験によって快樂のむなしさを知り、後者は苦難の現実を知ったのである。》(La. 126-Br. 174)。パスカルは更に、人間存在の根本的状态の洞察へと、われわれを導く——《私の一生の短い期間が、その前と後との永遠のなかに「一日で過ぎて行く客の思い出」のように呑み込まれ、私の占めているところばかりか、私を見るかぎりのところでも小さなこの空間が、私の知らない、そして私を知らない無限に広い空間のなかに沈められているのを考えめぐらすと、私があそこでなくてここにいることに恐れと驚きとを感じる。……》(La. 116-Br. 205)。そうして更にパスカルは、人間存在および自然存在の多様性への洞察をも促す——《多様性。／……人間は一つの実体である。しかしもしそれを解剖すれば、いったいどうなるだろう。頭、心臓、胃、

血管，おのおのの血管，血管のおのおの部分，血液，血液のおのおの液体。……》(La. 113-Br. 115)。パスカルが，この fr. を記した真意は，12°《人間を知ることから神への移行》の章中における高名なる一断章を参照するとき，明瞭である——《……しかし私は，人間に他の同じように驚くべき驚異を示そうと思うのであるが，それにはその知るかぎりのなかで最も微細なものを探求するがいい。一匹の^だに^が，その小さな身体^のなか^に，くらべようもないほどに更に小さな部分，すなわち関節のある足，その足のなかの血管，その血管のなかの血，その血のなかの液，その液のなかのしずく，そのしずくのなかの蒸気を彼に提出するがいい。そしてこれらのものをなおも分割していき，ついに彼がそれを考えることに力尽きてしまうがいい。……それなら人間は，事物の原理をも究極をも知ることができないという永遠の絶望のなかにあって，ただ事物の外観を見る以外に，いったい何ができるのであろう。すべてのものは，虚無から出て無限にまで運ばれていく。だれがこの驚くべき歩みについていくというのだろう。これらの不可思議の創造主は，それを包含している。他の何びともそれはできない。……》(La. 390-Br. 72)。かくして La. 390 したがって La. 113 の叙述の《背後の思想》une pensée de derrière には，《創造主》l'auteur への移行が，秘められていたのである。

〔Ⅱ〕 補足的役割の諸断章について。

〔Ⅰ〕 において引用された諸断章以外の fr. は，すべて〔Ⅰ〕の(一)，(二)，(三)のいずれかに関するものであって，具体例・補足例の役割を果すものである。より詳細に言えば，(一) La. 106-Br. 332, La. 107-Br. 296, La. 109-Br. 309, La. 111-Br. 151, La. 112-Br. 295, La. 115-Br. 879, La. 122-Br. 454, La. 96-Br. 401 (44), La. 142-Br. 214 (66) の諸断章は，人間の個人的心理・行動の無根拠性，不合理性，不当性のいずれか（ないし一つ以上）に関するものである。

(二) La. 110-Br. 177 は，人間存在の変化性を示す例であり，(三) La. 118-Br. 165 の 2 は，不幸・弱さにかんするものである。また《惨めさ》を補足する例としては，La. 119-Br. 405, La. 129-Br. 399 (53), La. 154-Br. 101 (78) の三断章が，見出される。

(四) 最後に La. 117-Br. 174 が，内容上 La. 126-Br. 174 (50) と連関するもの

であり、《人は自分自身を知らなければならない》という主旨を、具体的に敷衍するものであることは、言うまでも無い。

7°《偉大さ》

〔I〕 動物と人間との違いについて。

(一) 動物の本性は、自然的本能にあるということに就いて——この主旨を説いている断章には、La. 230-Br. 341, La. 231-Br. 340 および La. 211-Br. 343 が存するが、このうち La. 230 は次のごとく述べている——《リアンクールの静魚と蛙の話。それらはいつもそうするのであって、決して違うことをしない。また別の精神的なこともしない。》パスカルはこの fr. で、デカルトの動物機械論の立場に立って、リアンクール公のこの説への反論に対して、さらに反論しているのである。次の La. 231 の《計算器》la machine d'arithmétique の思考的機能の紹介も、一見思考と似た働きをするとはいえ、このものが有意的であるとは言えないこと、さらに動物の有意性も、人間の有意性とは異なる非精神的の、自然的本能的なものに過ぎないということ、これらの事を説くのが、パスカルの意図であったと思われる。

(二) 《魂の非物質性》immatérialité de l'âme, 《非物質的なもの》の存在の指摘——La. 212-Br. 339-2, La. 219-Br. 349。

(三) 動物と人間との差異の具体的特徴は、前者が《本能的に》par instinct に、後者が《精神的に》par esprit 行動する点にあるということ——La. 209-Br. 342。

〔II〕 人間の偉大さについて。

(一) 人間の偉大さの証明(A)——人間には、偉大さを志向する本能的傾向がある——La. 227-Br. 411 (110), La. 134-Br. 408 (58), La. 91-Br. 404 (39), La. 223-Br. 400 (106)。

(二) 人間の偉大さの証明(B)——人間の《惨めさ》からも、人間の偉大さを結論しうる——La. 218-Br. 397, La. 220-Br. 398, La. 221-Br. 409, La. 222-Br. 402。

(三) 偉大さの具体的内容——(a)人間の本性は《思考》la pensée にある——

La. 215-Br. 339, La. 217-Br. 348, La. 233-Br. 346 (116), La. 226-Br. 146 (109)。

(b)人間の偉大さは、《中間を満たす》remplir tout l'entre-deux ことにある
 ——La. 229-Br. 353 (112)。

〔Ⅲ〕 懐疑論と独断論の長短について。

(一) 両論とも、《理性》raison の立場に——肯定的にないし否定的に——固執する部分真理を主張するものであること——La. 213-Br. 392, La. 298-Br. 385。

(二) 従って両論とも、「人間の偉大さは《中間》を満たすことにある」という原理に反する——La. 289-Br. 378。

〔Ⅳ〕 真理の認識能力の多様性について。

真理の認識能力としては、《理性》raison の外に、《本能》instinct, 《心情》cœur なるものがあり、而して《神から心情の直感によって宗教を与えられた者は、非常に幸福である……》ということ——La. 214-Br. 282, La. 216-Br. 344。

以上〔Ⅱ〕～〔Ⅳ〕について、補足再言すれば、人間の偉大さは《思考》に存するが、しかしこの《思考》なるものは、パスカルによれば、理性の働きに尽きるべきものではない。真の《思考》とは、理性・本能・心情の三者の働きを、適材適所的にあるいは総合的に駆使するところに成り立つとするのが、パスカルの説かんとする主旨である。《中間を満たす》ということも、その内実は叙上の三認識能力の発揮により、両端を媒介止揚すること乃至これに近いものであるということは、『パンセ』の思想全体から察知しうるところであり、就中 La. 180-Br. 337 (9°《現象の理由》の章) 中における《正から反へ》le pour au contre の進展は、この好い例である——《現象の理由。／漸層法。民衆は高貴な生まれの人々を尊敬する。生半可な諸者連は、生まれというものは、その人自身の優秀さではなく、偶然的なものだと言って、高貴な生まれの人たちを軽く見る。識者たちは、民衆と同じ考えからではなく、背後の思想 (la pensée de derrière) によって、この人たちを敬う。知識よりも熱心さに勝っている。信仰家たちは、この人々が識者たちに敬われているその理由を知っているながら、この人たちを軽蔑する。なぜと言って、彼ら信者たちは、信仰の与えた新しい

光によって判断するからである。しかし、完全なるキリスト者は、別のより一層高い光によって、この人々に対し敬意を払う。／かように、人々が光を持つに連れて、その意見は、正から反へと相次いで進むのだ。》

8° ≪対立（矛盾）≫

〔I〕 人間本性の対立（矛盾）性について。

パスカルは、≪contrariétés≫なる語を、論理学上の＜矛盾＞の意味のみならず、これを含む広義の＜対立＞関係の意に用いており、文学的に、人間なるものを≪怪物≫chimère、≪新奇なもの≫nouveauté、≪妖怪≫monstre、≪混沌≫chaos等と呼んでいる（La. 246-Br. 434）。

（一）人間本性にかんする二つの見方——一つの見方に基づくとき、人間は≪偉大≫であるが、他のもう一つの見方によれば、≪人間は下賤で卑劣である。≫（La. 242-Br. 415）。

（二）人間本性の対立矛盾について知らせて呉れるもの——(a)≪本能と経験≫（La. 243-Br. 396）。(b)論理の帰結——≪惨めさは偉大から結論され、偉大は惨めさから結論される……一方の人たちが偉大さを示すために言いたすすべてのことは、他方の人たちが惨めさを結論する論拠に役立つばかりであった。なぜなら、人はいっそう高いところから墮ちれば墮ちただけ、それだけもっと惨めであるからである。そして、他の人たちの場合は、その逆である。……要するに、人間は自分が惨めであることを知っている。だから、彼は惨めである。なぜなら、事実そうなのだから。だが、彼は、実に偉大である。なぜなら惨めであることを知っているから。≫（La. 237-Br. 416）。

（三）対立矛盾の諸様相——(a)人間本性の対立的性格の代表としての、≪偉大≫と≪悲惨≫の同時存在（La. 232-Br. 365 (115), La. 235-Br. 148, La. 252-Br. 443 (122), La. 257-Br. 358 (127))。

(b) その他の諸形態——(i)≪憶病≫と≪向こう見ず≫の二重性（La. 239-Br. 125）。(ii)≪理性対情念≫の戦い（La. 249-Br. 413 (119), La. 253-Br. 412 (123))。 (iii)≪感じやすさ≫と≪無感覚≫（La. 20-Br. 198 (20))。 (iv)評価の異常な狂い（La. 238-Br. 157, La. 22-Br. 193 (22), La. 259-Br. 215 (129))。 (v)≪自然≫

と《習慣》の対立および相互作用 (La. 254-Br. 97 (124))。 (ハ)《職業》・《思想》の多様性 (La. 244-Br. 116)。

(c) 人間存在の怪物性としての転移性 (La. 240-Br. 92, La. 241-Br. 93, La. 162-Br. 94 (83))。

〔Ⅱ〕 人間本性を解き明かす可能性を持つところの宗教について。

(一) 人間本性の対立の認識から真理探求の願望への誘導——La. 234-Br. 423, La. 18-Br. 419 (18), La. 245-Br. 420, La. 236-Br. 418。

(二) 宗教によらなければ、真理を知りえないということ——La. 248-Br. 424 (118), La. 250-Br. 588 bis (120), La. 261-Br. 386 (131), La. 246-Br. 434。これらの fr. のうち、La. 250 は、《相反。——この宗教の無限の知恵と愚かさ。》という短断章であるが、この短かさは計画されたもので、後に19°《宗教の基礎と反論への回答》中の La. 469-Br. 588 で、本格的に触れられる予定の前兆であり、彼の手法たる《漸層法》gradation の一端を示すものである。

ところでこの断章 (La. 250) における宗教の《知恵》sagesse と《愚かさ》folie とについて説明すれば、前者 (知恵) は預言・奇蹟等による創造神への知的確信の附与 (われわれに対する) を意味するものであり、後者 (愚かさ) は原罪の遺伝と神の愛という超理性的次元における非合理的出来事の生起の確信を、意味するものである。而してかかる教義を有するキリスト教こそ、人間存在の本質的対立を解き明かす可能性を持つものであると、パスカルは言おうとするのである。

9°《現象の理由》

本章では、パスカルの意図した叙述方法が遺憾なく実施されている。彼は、《第1部序言》(La, 48-Br, 62(36)) 中において彼が評価したモンテーニュの《話題から話題へと飛ん》だ《垢抜けした様子》la bon air を、彼自身のやり方で実現しようとしたのである。即ち彼の人性論的洞察ならびに科学的・哲学的・宗教的考察が、随所に見られる所以である。したがって、《現象(結果)》effets とその《理由》raisons に係わるかつ興味ある諸考察を、多彩に展開している。以下この章中の内容を、分類整理して掲げることにし度い。

〔Ⅰ〕 ≪力≫force をその≪理由≫ないし≪原因≫cause とする諸現象について——La. 171-Br. 299, La. 175-Br. 878, La. 176-Br. 297, La. 178-Br. 302, La. 179-Br. 315, La. 185-Br. 316, La. 187-Br. 334, La. 190-Br. 467, La. 192-Br. 298, La. 197-Br. 303(94), La. 200-Br. 311(97), La. 201-Br. 301(98), La. 204-Br. 306(101)。

以上が、≪力≫を理由とする諸現象に関する叙述であるが、このうち代表的なるものを、次に引用しておく——≪「極度の権力は極度の不正である」／多数主義は最善の道である。それはあらわであり、服従させる力を持っているから。とはいえ、これは最も無能な人々の意見である。／もしできたなら、人は力を正義の手においたであろう。だが、力は物質的特性であって、人の意のままに行使するのを許さないのに反して、正義は人の意のままに処理しうる精神的特性であるので、人は正義を力の手においたのである。そういうわけで、人は守らざるをえないことを正義と呼ぶ。／ここから剣の威力が生じてくる。剣は真の威力を与えるからである。／そうでなかったら、人は暴力と正義とが互いに対立するのを見たであろう（『プロヴァンシアル第12の手紙』の結び）。／ここからフロンドの不正、すなわち、そのいわゆる正義を力に対抗させるということが生じる。／教会においては同様でない。なぜなら、そこには真の正義はあるが、少しの暴力もないからである≫(La. 175), ≪世論と想像力との上に基礎づけられた支配は、しばらくのあいだ君臨する。そしてこの支配は心地よく、自発的である。力の支配は、常に君臨する。だから世論は、この世の主のようなものであるが、力はこの世の暴君である。≫(La. 200)。

〔Ⅱ〕 ≪諸意見≫opinions の段階性と、各意見の内的理由としての≪背後の思想（後ろ側の考え）≫la pensée de derrière について——La. 180-Br. 337, La. 181-Br. 336, La. 182-Br. 335, La. 183-Br. 328, La. 191-Br. 324。なお La. 183 について附言すれば、この fr. 中には、パスカル自身の見解とその根拠（理由）の存在にかんする暗示が、見られる。彼は彼自身の意見（パスカルの背後の思想）を、より詳細に述べる予定であったと見られるが、その一部は La. 180-Br. 337, La. 182-Br. 335 のうちに見られる。

また La. 191 について補足すれば、この断章は、≪民衆はきわめて健全な意

見を持っている」という事例（現象）にかんするものであるが、この現象の《理由》そのものは、十分語られていない。しかしこの《理由》に対するパスカルの志向は、十分感得しえられる。事実他章および他の諸断章中に、その理由の若干が見られる——ex. 2°《空しさ》の章（〔Ⅱ〕の(一)の(h)参照）、5°《退屈と人間の本質》の章および La. 180, La. 182, La. 185, La. 346-Br. 234 (181)。

〔Ⅲ〕 《習慣》coutume を原因とする諸現象について——La. 194-Br. 89 (91), La. 195-Br. 325(92), La. 198-Br. 312(95), La. 202-Br. 96(99)。

〔Ⅳ〕 《想像力》imagination に依存する諸現象について——La. 177-Br. 307, La. 189-Br. 536, La. 207-Br. 304(104)。なお補足的に附言すれば、《想像力》は習慣と関連するものであり (La. 189), また《力》とも相補的關係に存するのであって、われわれはこの事に留意せねばならないのである。

〔Ⅴ〕 その他の事例について——以上の外諸断章についても、パスカルは興味あるテーマを提示し、そこに述べられた諸現象の理由について、彼独自の洞察を示している。すなわち、(一)他人の誤ちを、その他人に対して効果的に指摘するやり方や通常の場合における人の確信の仕方と、これらにおける理由 (La. 5-Br. 9(5), La. 6-Br. 10(6))。 (二)気分の快・不快の理由 (La. 9-Br. 276(9))。 (三)利害に無関係な事柄にかんして、人は嘘をつかないとは、必ずしも言えないということの理由 (La. 149-Br. 108(73))。 (四)プラトンやアリストテレスたちの振舞とその理由 (La. 196-Br. 331(93))。 (五)《時は、苦しみや争いを癒す》ということの理由 (La. 206-Br. 122(103))。 (六)《世の中で最も不合理なことが、最も合理的なことになる》ことこの理由 (La. 208-Br. 320(105))。 (七)車輪の運動と車輪上の位置との因果関係による比喩的説明 (La. 258-Br. 180(128))。 (八)困難な事件の時でも、いつも都合のよい希望を持ち、風向きが良くなることを期待している人達が、事が巧く運ばなかった場合にも、失望落胆しないということの特種な理由 (La. 307-Br. 182(160))。 (九)《敬意》を表することは、《一見空しい様であるが、極めて正しい》ということの理由 (La. 170-Br. 317)。 (十)《世間は物事をよく判断する》ということの理由 (La. 173-Br. 327)。 (十一)《内乱》が《最大の災い》である理由 (La. 184-Br. 313)。 (十二)《多くの美の原因》としての《人間の弱さ》 (La. 186-Br. 329)。 (十三)《びっこの人が、われわれをい

らいらさせないのに、びっこの精神を持った人が、われわれをいらいらさせる」ことの理由 (La. 188-Br. 80)。(齒)《貴族であること》が《大きな得》であることの理由。

〔Ⅵ〕 この章中には、なお留意すべき fr. が存する。それは La. 172-Br. 271 であるが、この中でパスカルは、《われわれを幼年に向わせる (われわれを童心に帰らせる)》nous envoie à l'enfance ことの宗教的理由として、《知恵》la sagesse を挙げており、また既出の La. 189 および La. 194 は、ともに信仰と反復的行為との関係を説いている。後者は後に、信仰と習慣との関連を説くパスカル独自の方法論として、処々に展開されるものである——11°《始め》の章中の La. 343-Br. 233, 13°《理性の服従と利用》の章における La. 7-Br. 252(7) と La. 396-Br. 245, 23°《イエス・キリストの証拠》中の La. 529-Br. 782。

扱て最後に述べて置かなければならないことは、この章がいかに読者を惹きつける主題・問題に富んでいようとも、パスカルの意図の中心には、《諸現象 (結果)》effets には《理由》raison ないし《原因》cause なるものが存するという、一般的原理的關係の観念があり、したがって人間の《偉大さ》grandeur と《惨めさ》misère という相反する現象にも、必ずや原因なり理由が存しなければならぬという洞察への、読者に対する関心の喚起ないし読者への暗示が存在することは、否み難いのである。要するに本章は、今後の諸章において展開されるべき論述の予備的手段であり、一種の伏線と言うべきものである。

1°章以降の論述の経過について

〔Ⅰ〕 1°《順序(秩序)》の章の主要内容は、われわれの所謂非分類断章群 (N. c.) に見られるものである。その主旨は、《ordre》と《真理》と《自然》の三者の内的関連を辿りつつ、《naturel》な秩序を——外的にもはたまた内的にも——尊重すべきことを、説く点に存するのである。而して《アポロジ》の論述にかんするかぎり、その外的なる自然の順序を尊重することとは、——パスカルの立場にあっては——モンテーニュの手法 (《第1部序言》参照) を利用することによって展開される順序のことである。

〔Ⅱ〕 2°《空しさ》, 4°《気晴らし》, 5°《退屈と人間の本性》の三章の内容

は、要するに 6°《惨めさ》の章が説くところに包括しうるものである。3°《欺瞞的諸勢力》の章の主旨は、形式上直接には、6°章中に現われていないが、この章(3°)の言わんとするところに照らして、《欺瞞的諸勢力》が、人間存在の《悲惨》と本質的に関係することは、全く疑いえない。なぜなら、これらの《勢力》puissances は、諸々の《誤謬》erreurs を生み出すからである。

〔Ⅲ〕 7°《偉大さ》の章の内容は、言うまでもなく、人間本性の《悲惨》のアンチテーゼであり、8°《対立(矛盾)》の章は、この対立を契機として、人間本性一般の対立矛盾性を説くものである。そうしてこの対立矛盾は、おのずからかかる《現象の理由》(9°章)は、何かという問題を提起せずには置かないのであるが、この章では未だこうした対立矛盾の理由については、直接触れてはいない。しかし本章(9°)が、それへの確かな伏線であることは、既に述べられた通りである。

《第2部序言》

〔Ⅰ〕 La. 49-Br. 242(37) について。

この fr. は、《自然界の被造物によって神を証明しようとする》ことの不可であること、神を証明しうるのは、《イエス・キリスト》によってのみであること、なぜなら父たる神は、《隠れた神》Dieu caché であるが故である。こうしたことが、《第2部序言》の主旨であり、これは必然的に次の断章(La. 29)と関連するものである。

〔Ⅱ〕 La. 29-Br. 60 について。

この断章中には、《第2部。神とともにある人間の至福。》および《第2部。修理者が存在すること。聖書によって。》なる叙述が存する。これらのタイトルは、それぞれ《第1部。》(この fr. 中における)のそれらに対立するものである。

扱て人間本性の墮落による《人間の惨めさ》を救いうるものは、《贖い主》としてのイエス・キリストのみであり、したがって《神とともにある》者は、罪を贖われて至福のうちにあることになる。而してイエス・キリストの神たることを示すものは、まさに《聖書》中に書かれてあり、《聖書》こそは、子た

る神と父たる神（ヤーウエ）との証しを記録するものである。なぜなら、子たる神を人間に授けたものは父なる神であり、われわれ人間にとっては、父たる神が子たる神を授けたその限りにおいて、父たる神の存在が知られるからである。ところで、子と父との各存在ならびに両者の関連（cx. 《預言》, 《表（象）徴》, 《奇蹟》, etc.）を叙述するものは、まさに新・旧の聖書であり、これを精査すれば、子たる神を手掛りとして父たる神の証しを発見しうるとするのが、パスカルの考えであったと、推定される。かくて20°章以下の《キリスト教の証拠》les preuves de la religion chrétienne (La. 12-Br. 195) が、提示展開されるのである。

かように神の証明が、聖書のうちなるイエス・キリストを拠り所として、為されなければならぬ以上、自然界による神の存在の証明は、正統的なものとは言い難い。以上が、《第2部序言》の概要である。

10°《A. P. R.》

この章の内容については、既に拙論のVIII・IX・Xにおいて、述べられているが、この章の《アポロジ》における意義は、われわれにとって極めて重大である。なぜなら、この章中の叙述内容の順序が、同時に《第2部》Seconde partie 前半を構成する諸《章》の順序を示しておるからである。ところで拙論のVIII~Xにあっては、10°(11°)《A. P. R.》(カッコ内の数字はLafumaによるもの)の叙述中の最初の部分にかんしては、説明不足であったので、この際これを充実することにし度い。

[I] 扱てこの章(10°)は、長断章1個(La. 309-Br. 430)から成り立っているが、叙述はその次の如く始まるのである——《A. P. R. 始め。／不可解を説明したのちに。／人間の偉大さと惨めさとは、こんなにも明らかであるから、真の宗教はどうしてもわれわれに、人間のなかには何らかの偉大さの大きな原理が存在し、また惨めさの大きな原理が存在することを教えてくれなければならない。／すなわち、真の宗教は、われわれに、これらの驚くべき対立を説明してくれなければならないのである。／》

われわれは、La. 41-Br. 494(29)を、この10°章のものと推定したが、その

理由は、両断章の叙するところに一致が見られるからである。La. 41の全文は、次の如くである——《真の宗教は、偉大と悲惨とを教え、自己の尊重と軽蔑とに、愛と憎しみとに、導くものでなければならない。》この引用文と、前述のLa. 309（本章）中の《人間の偉大さと惨めさとは、》以下の部分とを比較するとき、後者（La. 309）が前者（La. 41）の《真の宗教は、偉大と悲惨とを教え、》なる部分を、詳細化したものに外ならないことを、われわれは知るであろう。而してその最後の部分は、人間の偉大と悲惨との《対立（矛盾）》を解くものが、《真の宗教》であることを、提示するものである。即ちこの部分は、キリスト教の理論にかんするものであるが、La. 41中の《自己の尊重》云々は、キリスト教の実践の部分を示すものである。これによってわれわれは、La. 309の最初の部分を、La. 41によって補足せんとしたことを、理解しうるのであって、La. 41（N. c.）が改めて——Classé（La. 309）の書かれた後に——書かれた所以を知りうるのである。

〔Ⅱ〕 扱て(-)における最初の引用文ならびにこれ以下の引用文（後出の引用文）を概観するとき、《第2部》に所属するところの而して初めの数章に相当する叙述を、見出すことが出来る。先づ《A. P. R. 始め。》は、《第2部》がいよいよ《Apologie》の本格的開始であることを、明示するものである。《A. P. R. 》の《A. 》が、《Apologie》の略語であることは、既にわれわれの論じた所である（XI・XX回参照）。そうして次に記された《始め》Commencementは、パスカルの《アポロジー》の中心的部分の《始め》を意味するとともに、《第2部》中の11°《始め》Commencementの《章》chapitreを意味するものである。即ち両者是对应的関係を有しておる（VIII回，II，(-)，p. 180-181参照）。それゆえ11°《始め》の章は、10°《A. P. R. 》を除いて、《第2部》の最初の位置を占めることは、明らかである（10°章が何故《第2部》の冒頭に来るのかは、後述）。

〔Ⅲ〕 次に上掲引用文中《A. P. R. 始め。》に続くものは、《不可解を説明したのちに。》après avoir expliqué l'incompréhensibilitéである。この語句中の《不可解》とは、人間本性の対立矛盾（7°章）に対する不可解、換言すれば人間本性の対立矛盾という《現象》（結果）の《理由》なるものの不可解を意味

する。かくて《不可解》云々の語句は、9°《現象の理由》(第1部の最後の章)と関連し、かつこれに11°《A. P. R.》が接続するものであることを、示すものに外ならない。而してかかる人間本性の対立(矛盾)の代表的なるものは、人間の《偉大さ》と《惨めさ》の対立であるから、この章(11°)が7°《偉大さ》および6°《惨めさ》の両章と関係を有するものであることが、分る。以上により、11°《A. P. R.》の章が、《第1部》と《第2部》とのつなぎ目であることが、われわれには了解されるのである。

〔Ⅳ〕 《不可解を説明したのちに。》につづく上掲引用文は、《人間の偉大さと惨めさ》なる人間本性の認識、すなわち《人間を知ること》*la connaissance de l'homme* (12°章の章名の一部)に照応一致している。而して《真の宗教は、われわれに、これらの驚くべき対立を説明してくれなければならないのである。》は、われわれが、《驚くべき対立を説明してくれる》ところの《真の宗教》*la véritable religion* というものに、説明を求むべきこと、換言すれば《真の宗教》へ赴くべきこと、更に言えば真の宗教が説く《神》へと赴くべきことを、意味している。かくて《真の宗教は、……》なる叙述は、12°章中の《神への移行》*transition à Dieu* に対応しておるのであり、《人間の偉大さと惨めさ》云々の叙述は、全体として12°《人間を知ることから神への移行》*Transition de la connaissance de l'homme à Dieu* の章を予示するものであると、言いうるのである。

〔Ⅴ〕 われわれは、拙論 XVI 回中の分類表で、12°章のあとに13°《本性の墮落》*La nature est corrompue.* の章が置かれるべきことを示してあるが、叙述の順序の上からは、《真の宗教は、……》に直統する文章中には、この章(13°)に相当する文句は見出されない(これに続く叙述は、《至福》にかんするものである——IX回参照)。これは、《本性の墮落》の章(13°)が、10°《A. P. R.》の書かれた後で設けられたことに因ると、見られる。しかし人間本性の墮落は、人間の至福と本質的に関連しているので、墮落の事態は、当然14°《至福》*Le souverain Bien* の章に相当する10°章中の叙述に見出される——《……われわれの唯一の不幸は神より離れていることである》云々。しかしこの際われわれは、13°《本性の墮落》→14°《至福》の必然性を洞察しう

ることに、留意せねばならない。なぜなら、墮落した不幸なる人間の反省→神による救済の結果としての幸福の状態なる図式は、宗教一般に見られるものだからである。もちろん論理的順序（直前の図式）と叙述の順序とは、必ずしも一致しないとはいえ、パスカルにおいては、両者は一致していたと、見るべきである。このパスカル自身による叙述の順序は、La. 29-Br. 60中に明白に示されている——《第1部。神なき人間の惨めさ。》→《第2部。神とともにある人間の至福。》および《第1部。自然（本性）が腐敗していること。自然そのものによって。》→《第2部。修理者が存在すること。聖書によって。》

扱て既述のごとく、10°章中の《真の宗教は、われわれに、これらの驚くべき対立を説明してくれなければならないのである。》に直続する文中には、《本性の墮落》にかんする叙述は見られず、14°《至福》の章に相当する文章が見られるのである。然し(-)において述べられた如く、直前の引用文は、La. 41によって、特にこの fr. の後半の部分——《真の宗教は、……自己の尊重と軽蔑とに、愛と憎しみとに、導くものでなければならない。》によって、補足されるべきものである。而してこの部分の内容は、端的に言えば、宗教的実践の内容であるということである。つまりパスカルは、真の宗教（キリスト教）の理論面のみならず実践面にかんする叙述の補足を、必要と認めたのである。

ところで宗教的実践とは、人間自身が自己を尊重し愛することと同時に自己を軽蔑し、憎むことでなければならない。何故ならパスカルにあっては、自己の本性は偉大であり、かつ悔い改めによって《至福》に与かりうるが故に、同時にまた《尊重》と《愛》との対象ともなるゆえである。それ故、本性の墮落のうちにある人間が、自己自身を至福の状態のうちにあるものへと変革することこそ、《アポロジ》におけるパスカルの宗教的倫理的実践の意図するものである。かかる実践的立場に立つ限り、パスカルにとって、宗教的倫理的探求の強化が必要となり、彼は14°《至福》の章の前に13°《本性の墮落》の章を、改めて挿入せざるを得なかったのである*。かくして断章 La. 41と13°《本性の墮落》及び14°《至福》の三者は、内面的必然的関連のうちにあると、言っているのである。言い換えれば、パスカルは《第2部》の構想に際して、倫理的意義を有した14°《至福》の章の設置を予定していたと、おもわれる。《至福

(最高善)》の問題は、古代以来の哲学的人間学的問題であった以上、パスカルが《アポロジ》の構築を意図した当初から、この問題の着手は、キリスト者としては勿論、哲学者としても、必須のものであったはずである。したがって《至福》の章の設定は、最初から彼の念頭に存したと、言えるのである。

他方において、《第1部》以来の《アポロジ》の筋書中には、人間本性の《偉大》と《悲惨》との矛盾対立の、理論的解明の問題が存していた。而して先述の《至福》の倫理学的問題の追究の線が、存在していた。パスカルは、Classé作製後、《至福》の章の内容と《A. P. R.》の最初の部分との、叙述上のギャップに気がつき、改めてLa. 41を書き（これが、このfr. が Non classéである理由である）、新たに13°《本性の墮落》の章を創設したのである。それ故、La. 41・《本性の墮落》・《至福》の三者は、前述のごとく一セットを構成しているのである。

* 13°章がClasséの liasses 中に後から挿入された事実は、この章のタイトルのみが入された紙片が、12°章の末尾に綴られていたという物理的状态から、明らかである。

〔Ⅴ〕 以上(二)及び(五)により、10°章中の《始め。》 \rightarrow 11°《始め》の章 \rightarrow 10°章中の《人間の偉大さと惨めさとは、こんなにも明らかであるから……》 \rightarrow 12°《人間を知ること》(12°章の前半) \rightarrow 10°章中の《真の宗教は、これら驚くべき対立を説明してくれなければならないのである。》 \rightarrow 12°《神への移行》(12°章の後半)。したがって11°《始め》 \rightarrow 12°《人間を知ること》+12°《神への移行》 \rightarrow 12°《人間を知ることから神への移行》 \rightarrow 13°《本性の墮落》 \rightarrow 14°《至福》となる（なお13°章・14°章の順序については、それぞれVIII回, II, (三)およびIX回, (五), (四)を参照のこと）。

〔Ⅵ〕 14°《至福》以下の諸章の順序にかんする推論は、IX回・X回において詳述されているので、筆を省くことにするが、茲では順序のみを掲げることにする \rightarrow 14°《至福》 \rightarrow 15°《哲学者たち》 \rightarrow 16°《他宗教の虚偽》 \rightarrow 17°《愛すべき宗教》 \rightarrow 19°《宗教の基礎と反論への回答》。この《章》の順序が、10°《A. P. R.》の叙述の順序にほぼ一致しておることは、既述の通りで

あるが、この事実は10°《A. P. R.》の内容がポール・ロワイヤル版《パンセ》の序文 (Filleau の〈Discours〉と Périer の〈Préface〉) の内容と一致している点から見て (VII回, III, (ハ)参照), パスカルのポール・ロワイヤルにおける講演の原稿と見做しうるものである。したがって《アポロジ》の章順序は、この10°章の叙述に依拠するのが、最も合理的なのであり、それゆえ『第一写本』 la Première Copie 中に見られるタイトル表の順序なるものは、正しいものではないことが、理解されるのである (VI回参照)。

〔Ⅷ〕 扱て19°《宗教の基礎と反論への回答》に相当する10°《A. P. R.》中の叙述を辿ることにしよう。この19°に続く部分は、神の擬人法的発言 (X回, (カ)参照) と《隠れた神》にかんする叙述 (X回, (ク)) とから成り、この章 (10°) は事実上後者で終わっている。われわれが以上を概観するとき、18°《理性の服従と利用》の章以降にかんするパスカルの叙述は、極めて簡略で、特に20°《キリスト教の道徳》以下の諸章 (20°~29°) の内容が、全く見出されないという印象を持たざるをえないのであるが、これらは擬人法的表現による神の言葉のうちに、融合され暗示されており、各章の順序については、全くこれを知り得ない。これはパスカルの意図がもたらした結果であって、理由は後述する如くである。しかし内容そのものは、全く欠如しているわけではなく、全く別の形式で内在しているのである。

例えば、18°章の《理性の服従と利用》に相当するものは、次の三個の叙述の主旨を総合することによって、察知することが可能である——(a)《……彼〔人間〕のあらゆる知識は、消し去られるか、かき乱されてしまうのだ。理性から独立して、しばしば理性の主となった感覚は、理性を快樂の追求へとかり立てた。》(b)《……われわれにはそれを神から教えてもらう以外のことはできないということを、われわれに告白させるような謙虚さでなければ、誠意あるものでも、理にかなったものでもないのである。》(c)《私〔神〕は、私のうちにある神性のしるしを、説得力のある証拠によって、あなたがたにはっきり見せようと思っているのである。》以上三個の引用文により、理性が本来不完全で弱さを持つものであり(a), 《謙虚さ》 *humilité* というものを持たなければならないこと(b), 即ち理性は神に服従すべきであるということが、分る。それに

も拘らず、《説得力のある証拠》*preuves convaincantes* の提示は、人間理性の働きを前提としておるかぎり、理性をそれに相応しく利用すべきであることが、了解されるのである（17°・18°・19°の章順序にかんする論証については、拙論X・XI回を参照のこと）。

29°章を除く20°～28°の諸章の内容は、パスカルの所謂《宗教の証拠》*preuves de la religion* (La. 38-Br. 290) であって、《アポロジー》中の核心的部分を構成するものである。換言すれば、これらの重要証拠は、19°《宗教の基礎と反論への回答》中の後半たる《反論への回答》の延長線上にあり、かつ一番の重要事項であって、パスカルの立場から見て、この内容を詳述することは、後来の内容に対する読者の興味を滅殺することになり、彼の著述方法の仕方と矛盾するものである。したがって彼は、宗教の証拠に相当する内容及びこれに対する不可欠の補強物たる《理性の服従と利用》に関する事項（X回参照）を、故意に暗示ないし省略したものと見られるが、《証拠》の存在自体は、前出の神の擬人法的言葉のうちに、明瞭に看取することが可能である——《説得力のある証拠》(上出)、《あなたがたが拒むことのできない不思議や証拠》*des merveilles et des preuves que vous ne puissiez refuser* が、即ちこれである。そうしてパスカルが、後来の内容を具体的に展開せず、問答体や《擬人法》(Prosopopée) の表現様式を利用しつつ、不信仰者に対して啓蒙的叙述を繰り広げていることは、読者の心理を配慮する点で、パスカルの巧妙なる著述方法を見事に示しておると言えよう。

[K] 10°章中の最後に述べられている《隠れた神》にかんする叙述は、10°章全体が《第2部》全体のダイジェスト版である以上、《第2部》の最終部分、すなわち29°《結論》*Conclusion* の章を構成するものでなければならない。この証明は、われわれ自身の手で、XV回の(162)中で行われているので、省略することにする。ともあれ以上[I]～[K]によって、《アポロジー》のプラン全体における10°《A. P. R.》の章の意義を、大略浮彫にしえたのである。

[X] 次にわれわれは、以下の事柄について考察しておく必要が存する。それは、《アポロジー》の《第2部》全体のダイジェストに外ならぬ10°《A. P. R.》の章が、なぜ存在するのか或はなぜ必要であったのか、という問題であ

る。上述のごとく、パスカルは、擬人法・問答体等の叙述形式を駆使して、論述を進めているとはいえ、10°章は所詮《第2部》全体のコピー的性格を、完全に脱却することはできない。それゆえ一種の鳥瞰図的役割をなす10°章を、《第2部》の最初に置くことは、読者に予備的知識を与え、読者の理解を容易ならしめる効果はあるにせよ、読者の内容に対する興味を多少とも減殺することになり兼ねないことも、否定しえない事実である。読者の理解を十全にするためならば、敢えて résumé に相当するものを冒頭に置かずとも、パスカルの秀れた筆力を以ってするなら、各章の叙述において読者の理解を可能にすることは、決して難事ではなかったであろう。また読者の十分なる理解を助けるためだけならば、《結論》中にないしはこの後に10°章の内容を置くことで事足りた筈である。従ってわれわれは、何故10°章が《第2部》の冒頭に來るのか、という疑問を抱かずにはおれないのである。その答えは、《A. P. R.》の略語が《Apologie (à ou de) Port-Royal》を意味するということが、換言すれば、《第2部》において展開されるべき《アポロジー》が、ポール・ロワイヤル独創のものであるという事柄を、世人に声明ないし宣言することこそ、パスカルの本来的意図であったのだ、ということである。この措置によって、パスカルが読者の興味と期待とを十二分に刺戟しうることは、われわれの容易に想像しうるころであって、彼の著作態度を一貫する、読者の心理洞察の巧妙さは、この際遺憾なく発揮されていると、言いうるのである。

扱てわれわれは、次の章を予め留意しておく必要がある。直前において見られた如く、パスカルは読者の関心を絶えず惹きつけ、或はこれを昂めることに意を用いていたのであるが、このため10°章中の各章に相当する内容の叙述と、実際に展開された各章（各リヤス）の内容とは、その主旨において同一であるにも拘らず、その外観ないし体裁において、しばしば不一致であるということである。これは、同一内容を対象として取り上げる視点の[・]_・変化によるものであって、この視点の多様性は、時として章名とその内容（共に同一リヤスを構成している）の不一致という印象を、従来の研究家たちに与えもしたのである。しかしわれわれが、『パンセ』全体を仔細に検討考察するならば、彼の思想および叙述するところはすべて、整合性を志向しており、論理的飛躍の回避が目

指されているのである。この限り、極く短い語句等は別として、彼の叙するところは明瞭であると、言いうるのである。

最後にわれわれは、10°章の叙述内容の順序と、《アポロジ》の章順序とが、一致することを説いたが、10°章執筆後、章順序の変更がありえたのではないか、という疑問に対して答えておき度い。

(-) 10°章の叙述によって、われわれが知りうる章順序は、13°《本性の墮落》の章を除く11°~17°の諸章の順序であるが、この順序は極めて自然かつ合理的であって、変更を要する程の無理、不自然さは無いということである。11°《始め》は、章名から推して、当然最初の位置を占めるべきものである。而してこれら諸章の叙述全体の構成のうちに、重要なテーマを為すものは、12°《人間を知ることから神への移行》および14°《至福》の問題である。このうち《人間を知ること》とは、人間本性の状態（偉大と悲惨）を自覚することであり、《第1部》の重要テーマと密着しているので、《第1部》に近い位置、すなわち11°《始め》の章に続くものと判定しうる。

次に《神への移行》とは、本質上《至福》を[・]_・目指すことであり、したがって12°《人間を知ることから神への移行》→14°《至福》となる。而してこの際、《至福》とは何ぞやという問題（幸福論）と、いかにしてこれに到達すべきかという方法論的問題とが、必然的に提起され、《哲学者たち》の所説とキリスト教から見た《他宗教》の教義とが、検討批判の対象となって登場することになる。ところでこれらの問題を真に解決しうるものは、キリスト教としての《愛すべき宗教》(17°章)のみであるから、パスカルの《漸層法》 gradation に従えば、当然17°章が最後の位置に来ることになる。

扱て《至福》の問題の提起が、哲学者たち並びに《他宗教》の登場の契機であるから、《至福》の章(14°)が《哲学者たち》(15°)及び《他宗教の虚偽》(16°)に先立つのが、当然である。すなわち14°章→(15°章・16°章)。

次に《哲学者たち》(15°)と《他宗教の虚偽》(16°)との前後関係が問題となるが、これは次の諸断章が手掛りとなる。(a)先づLa. 558—Br. 591において示されている図は、次の如くである。この図は上下二段に分れ、上段はイエス・キリストを中心として、左右やや下方にそれぞれ《異教徒》と《マホメッ

ト》の名が記され、下段には《神についての無知》という語句のみが、記されている。ところで《哲学者》なる名称は、上段には存しないので、下段の《神についての無知》Ignorance de Dieu のうちに分類されていることが、分る。

(b)この事実を裏付けるものは、次の三断章である——《彼ら〔哲学者〕は神を知っていて、しかも人々が神を愛することだけを願わず、彼ら自身にとどまってくれることを願ったのだ。彼らは人々の気ままな幸福の対象になることを望んだのだ。》(La. 280-Br. 463), 《哲学者たちが、「君たち自身に帰れ。君たちはそこで君たちの善を見いだすであろう」と言ったところで、無益である。人は彼らを信じない。彼らを信じるのは、最もむなしい愚かな人々である。》

(La. 281-Br. 464), 《諸宗教に対しては真剣でなければならない。真の異教徒、真のユダヤ人、真のキリスト者。》(La. 425-Br. 590)。

以上の三断章の内容を通読比較するとき、われわれは、パスカルが哲学者たちを蔑視し、《真の異教徒、真のユダヤ人》vrais païens, vrais juifs の方を重要視していたことを、知るであろう。それゆえ、非重要事項→重要事項という漸層法の配列傾向に従って、15°《哲学者たち》→16°《他宗教の虚偽》という章順序が、必然的に推定されうるのである。

(二) 次に10°章中の叙述における章順序が、後になって変更がなされたとするならば、この叙述自体にも、訂正が施されたことであろう。なぜなら、しばしばわれわれが述べて来たように、パスカルは Classé 執筆後、原稿の完成度を高めるために、削除・加筆等による訂正を行っていたからである。しかるに10°章中の該個処には、——La. 41 および13°章による補足を除いて——訂正は行われていない以上、変更は無かったものと、見るべきである。以上一、二により、われわれによる11°~17°の章順序の決定は、正しいものと言えよう。

11°《始め》

本章は、10°章の解説により、《アポロジ》の《第2部》の《始め》Commencementを意味する。《アポロジ》なるものが、キリスト教を擁護するものである限り、キリスト教に対する反対者たち及びその所説を論ずることになるのは、当然である。パスカルは、この章中で次の三つの事項を扱ってい

る。

〔I〕 《アポロジ》は、非キリスト者たちを説得することを目的とするものであるから、パスカルは信仰の立場から、人々を分類し、説得すべき相手を明らかにしている——《三種類の人々があるだけである。一は、神を見いだしたので、これに仕えている人々。他は、神を見いだしていないので、これを求めることに従事している人々。いま一つは、神を見いだしてもいず、求めもしないで暮している人々。最初の人々は、理にかなっており幸福である。最後の人々は、愚かであり不幸である。中間の人々は、不幸であり理にかなっている。》 (La. 336-Br. 257)。

〔II〕 直前の引用文により、無信仰者には、大別して二通りあることが分る。

(一)——パスカルは、消極的無神論者（前出の《中間の人々》）を含む無神論者一般に対する接し方ないし態度を、次の諸断章において述べている——La. 332-Br. 190, La. 338-Br. 189, La. 350-Br. 240(185)。このうち代表的なものは、La. 332である——《さがし求めている無神論者に同情すること。なぜなら、彼らはすでに十分不幸ではなからうか。それを得意としている者に対しては難詰すること。》

(二)——次に(a)の人々に比して、積極的無神論者と言うべき人たち、即ち学問的無神論者を含むところの、《神を見いだしてもいず、求めもしないで暮している人々》に対する批判的態度を、われわれは次の二断章のうちに、これを見出すことが出来る——La. 333-Br. 225, La. 337-Br. 221。後者は、《無神論者たちは、完全に明白なことを言うべきである。ところで魂が物質的であるということは、完全に明白ではない。》 (La. 337) と、学問的無神論者を評しているが、この種の無神論者の所説に対する反論は、19°《宗教の基礎と反論への回答》の章中で、十分述べられる予定であったと、見られる。

〔III〕 次にわれわれは、無信仰者に対する具体的な説得方法とその実例について、触れねばならない。これは大別して、二つに区分し得られる。

(一) ——理性（広義）に訴えるもの。(a)不信仰者たちが、聖書を十分細部に汎って検討せずに、聖書を批判していることに対する反論 (La. 326-Br. 226)。(b)数学的理性に訴えるもの。(i)《無限の速度であらゆるところを運動している

一つの点」と「神が無限であり、しかも部分を持たないということ」との相似性の指摘 (La. 344-Br. 231(179), La. 348-Br. 232(183))。 (ii)「確率計算」 les partis によるもの (La. 329-Br. 238, La. 330-Br. 237, La. 334-Br. 236, La. 335-Br. 204, La. 343-Br. 233(178), La. 345-Br. 203(180), La. 346-Br. 234(181))。これらの断章のうち、La. 345は「つまらぬものの魅力」情念にじゃまされないために、一週間の生命しかないもののように行動しよう。」という短いものであるが、この fr. が「確率計算」と関係を有するのは、次の断章からこれを推察することが出来る。「確率計算。／次のいろいろの仮定のどれに従うかによって、この世でそれぞれ違った生き方をしなければならない。……五、この世に長くはいないことは確かで、一時間いられるかどうかも不確かである場合。／この最後の仮定こそ、われわれの場合である。」 (La. 330) この fr. により、「一時間いられるかどうかも不確かである場合」こそが、「われわれの場合である」以上、「一週間の生命しかないもののように行動しよう。」という生き方は、当然だからである。さて La. 335-Br. 204は、「もし一週間の生涯なら、ささげるべきであるならば、百年でもささげるべきである。」というものであるが、これも La. 345および La. 330と無関係ではない。なぜなら、La. 335の「もし一週間の生涯なら、……」は、La. 345中の「一週間の生命しかないもののように行動しよう」という命題を前提しているからであり、そうして La. 345は前述のごとく、La. 330の論理的帰結と言うべきものだからである。したがって三断章は、La. 330→La. 345→La. 335と、論理的連鎖のうちにあることが、分るのである。われわれはこれら三個の fr. を、理性に訴える仕方の説得法のうちに分類したが、より厳密には、理性を広義に解し、カントの所謂理論理性と実践理性とを総合したものにほぼ相当すると、見做してよいであろう。

(二) ——心情に訴えるもの。(a)心情・本能の開示作用の独自性を示して、神への移行を意図したもの (La. 331-Br. 281)。この断章は、「心情／本能／諸諸原理。」(全文) という短断章であるが、これらの語のうちに、「理性」が欠如していることに、われわれは留意する必要がある。なぜなら「心情」 coeur と「本能」 instinct との二者は、理性とは異った認識能力だからである——

《神を感じるのは、心情であって、理性ではない。信仰とはこのようなものである。理性にではなく、心情に感じられる神。》(La. 225-Br. 278), 《われわれが真理を知るのは、理性によるだけでなく、また心情によってである。われわれが第一原理 *les premiers principes* を知るのは、後者によるのである。それに関与しない理性が、それらの原理と戦おうとしてもむだである。》(La. 214-Br. 282), 《彼らには、気ばらしと仕事とを外に求めさず、一つのひそかな本能があり、それは彼らの絶えざる惨めさの意識から生じるものである。彼らにはまた、われわれの最初の本能の偉大さのなごりであるいま一つの秘かな本能があり、それが彼らに対して、幸福は事実安息のうちにしかないのであって、激動のなかにはないということを知らせているのである。そして、これらの相反する二つの本能から、彼らのうちに一つの漠然とした企てが形成される。それは、彼らの魂の奥底にあって、彼らの目には隠されているが、立ち騒ぐことによって安息へと向かうように、彼らをしむけるものである。》(La. 269-Br. 139)。以上の三断章により、《われわれの最初の本能の偉大さのなごりであるいま一つの秘かな本能》と《心情》との二者が協力するとき、われわれは神の啓示の認識に達することが可能であることを、知りえよう。そうしてパスカルのかかる思想は、彼の《覚え書》*le Mémorial* に記されているごとき、彼の宗教経験そのものに根差しておるのである。それゆえ La. 331は、無信仰の合理主義者たちに対する批判を、うちに含んでいるのである。

(b) 人間存在の諸状況の提示・描写・問題提起によって説得しようとする仕方。これを示す断章としては、次のものが存する——La. 327-Br. 211, La. 328-Br. 213, La. 339-Br. 200, La. 340-Br. 218, La. 341-Br. 210, La. 342-Br. 183, La. 314-Br. 199(166), La. 347-Br. 121(182)。

これらのうち、La. 328 および La. 347 については、補足説明を要する。La. 328は、次の如くである——《われわれと、地獄または天国とのあいだには、この世で最ももろいものである生命が、介在しているだけである。》この断章でパスカルが言わんとすることは、時間的に有限なるものと永遠なるものとの対立、即ちこの世の存在の有限性と《天国》・《地獄》の永遠性との対比であり、かつこの原事実に対する反省の督促である。La. 328中の《われわれ》

nous とは、勿論人間のことであり、この世における時間的有限的存在の点では、《この世で最ももろいものである生命》たる人間以外の生物と、異なるものではない。何故なら、《人間は自然のうちで最も弱い一本の葦にすぎない。》*L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature; (La. 391-Br. 347)* からである。他方、《天国》*le ciel* および《地獄》*l'enfer* が、永遠なるものであることは、次の断章によって明らかである——《死とともに永遠の本質的な祝福がはじまる……》*(La. 717-Br. 447)*, 《……彼らを刻々脅かしている死は、やがて彼らを、永遠に、あるいは無とされ、あるいは不幸という、恐ろしい必然のなかへ誤りなく置くのである。》*(La. 12-Br. 195)*。而してこれらの引用文における、《永遠の本質的な祝福》が《天国》における状態に、そうして《永遠に》無ないし不幸になるということが《地獄》に陥った人間の有様に、それぞれ照応しておることは、常識上明らかであろう。しかも、《われわれ》と《この世で最ももろいものである生命》とが対立せしめられておるのは、前者（われわれ人間存在）が、後者（最ももろいものたる生命）と同様《もろい》*fragile* ものであると同時に、《靈魂の不死》*immortalité de l'âme (La. 17-Br. 556)* を、その本質とする点において——パスカルの立場から観て——後者とは、異なるものであるということが、この断章 *(La. 328)* の《背後の思想》たることを、われわれは洞察しなければならないのである。

次に *La. 347* の内容は、以下の如くである。——《自然は常に同じことを繰り返す。年、日、時。空間と同様。そして数は、互いに端と端とがつながって続いている。こうして一種の無限と永遠とができる。しかし、これらすべてのもののどれかに無限や永遠のものがあるというわけではない。云々》この *fr.* が、なぜ無信仰者の説得と関係があるのか、一見不可解であると感じられよう。パスカルが説かんとする真意は、次の断章と比較するとき、自ずから浮び上がって来る——《……自然は自分の姿とその創造主の姿とを凡ゆるもののなかに刻み込んだので、それらのものは、ほとんどすべてその二重の無限性を、そこから受けている……》*(La. 390-Br. 72)*。すなわち、われわれは後者の断章により、《二重の無限性》*double infinité* があり、人間がその一部にすぎない自然というものの無限性なるものも、《その創造主》*son auteur* の無限性、即

ち《神の万能》la toute puissance de Dieu に由来するものであることを知るのであり、パスカルの言わんとすることも、茲に存するのである。

それゆえわれわれは、La. 347はLa. 390の下準備を為すものであることが、分るのである。そうしてこれを裏付ける事実、La. 347が11°章にぞくし、而してLa. 390が12°章に属しているという前後関係の事実である。要するにLa. 347は、神の無限性への志向を秘めておるのである。

〔Ⅳ〕最後にわれわれの注意すべき事柄は、パスカルの叙述方法の特徴である。それは視点の変化を、パスカルが意図的に行っているということである。これは無信仰者を対象とするキリスト教への誘導方法において、看取りうるものである。即ち数学的方法を利用する仕方がそうである。特に《賭》le Pariの断章(La. 343-Br. 233)に見られる如き《確率計算》の方法は、パスカル独創のものであり、当時の知識人を念頭に置いて考案されていたことが、容易に想像されるのである。かように視点に変化を与えて叙述することは、読者の興味を刺戟する点で効果的であることは、疑い得ないところであり、われわれは茲でも、パスカルの読者心理に対する計算を読み取りうるのである。かような視点の変化と、問題提起・謎の提出及びこれらの解決を後章に到るまで延期するという遣り口は、故意に行われていることを、われわれは常に念頭に置いていなくてはならないのである。

12°《人間を知ることから神への移行》

この章の構造は、単純である。第一は、人間存在の悲惨の提示ないし描写であり、第二は理知的に不可解な諸状態の提出、第三は、これらの自覚・反省を通じての宗教および神への誘導ということであって、要するに章名の意味するところに尽きる。しかし後述の如く、われわれはパスカルの異常な才能を感得せざるを得ないのである。

〔Ⅰ〕広義における《惨めさ》に属すべき人間の諸状況は、La. 393-Br. 517を除く全断章に汎って、多種多彩なるヴァリエーションにおいて示されている——例えば、《先入観》préventionによって導かれる《誤り》erreur, 《嘆かわしいこと》chose déployable, 《かわいそうなこと》chose pitoyable (以上

La. 384-Br. 98) ; 人間存在の無根拠性 (La. 385-Br. 693) ; ≪人間の盲目と悲惨≫ l'aveuglement et la misère de l'homme, ≪絶望≫ désespoir (以上 La. 389-Br. 693) ; ≪人間の不釣合≫ disproportion de l'homme, ≪無限と虚無との二つの深淵≫ ces deux abîmes de l'infini et du néant と ≪その不可思議≫ ces merveilles に対する恐れ (以上 La. 390-72) ; ≪一本の葦≫ un roseau にすぎない人間存在 (La. 391-Br. 347) ; ≪この無限の空間の永遠の沈黙が、私を怖れしめる。≫ Le silence éternel de ces espaces infinis m'effraie. (La. 393-Br. 206) ; 自然における ≪疑いと不安の種≫ matière de doute et d'inquiétude (La. 13-Br. 229(13)) ; 人間が自己の ≪地位≫ rang について ≪知らず≫ ne sait, ≪迷って≫ égaré いること (La. 312-Br. 427(164), La. 394-Br. 431(193)) ; ≪われわれの不分明≫ nos obscurités, ≪われわれの無価値≫ notre indignité (La. 316-Br. 558(168))。

〔Ⅱ〕 次に理性的立場から見て不可解な人間の諸状態を指摘して、神の許へ教導せんとする意図の窺える fr. としては、La. 390-Br. 72 および La. 161-Br. 417(82) が、存する——≪「精神と身体との結合様式は、人間に理解しえるところである。しかもこれが、すなわち人間なのである。」≫ (La. 390), ≪単一の主体≫ un sujet simple における ≪二重性≫ duplicité の不可解さ (La. 161)。

〔Ⅲ〕 第三に、〔Ⅰ〕・〔Ⅱ〕において提示ないし指摘された人間の諸状態、諸状況の自覚反省を通じて、神への移行を促そうとする諸断章が、当然乍らこの章中には見出される——La. 389-Br. 693, La. 390-Br. 72, La. 393-Br. 517, La. 39-Br. 421(27), La. 131-Br. 406(505), La. 260-Br. 532(130), La. 262-Br. 580(132), La. 319-Br. 559(171), La. 395-Br. 660(194)。

これらのうち代表的な例として、われわれは断章 La. 390中の一叙述を引用しよう——≪それなら人間は、事物の原理をも究極をも知ることが出来ないという永遠の絶望のなかにあって、ただ事物の外観を見る以外に、いったい何ができるのであろう。すべてのものは、虚無から出て無限にまで運ばれていく。だれがこの驚くべき歩みについていくというのだろう。これらの不可思議の創造主は、それを包含している。他の何びとにもそれは出来ない。≫

〔Ⅳ〕 最後にわれわれが触れるべきは、前章にも見られたのと等しく、パス

カルの同一叙述対象にかんする「視点の変化」ということである。《第1部》ならびに10°《A. P. R.》の章にあっては、人間の《惨めさ》と《偉大さ》の対立（矛盾）の《理由》追究という形ちで、《真の宗教》ないし神への移行という主旨が、展開されて来た。しかし本章では、同一形式の反復を避けて、パスカルは《偉大さ》に触れるところ極めて僅少で、上述の〔I〕・〔II〕に見られる如く、主として人間の悲惨（広義）を多様に描写することによって、この同一主旨の実現を試みようとしている。

かように《惨めさ》のみに関する展示にもかかわらず、その具体的様相は、反復による無味乾燥を、少しもわれわれに感ぜしめないということである。これはまさに、パスカルの多彩な才能の結果と見るべきものである、即ちモラリスト、科学者、哲学者、宗教家の各素質を兼備するとともに、彼が秀れた文筆家であったことに因ると、言いうるものである。かの高名なる La. 390-Br. 72 中に見られる宇宙・原子の世界・人間の感覚・事物の部分と全体との関係等にかんする記述は、《第1部》とは異なる生彩を放っておくことは、読む者にとって、一目瞭然であると言わねばならないのであり、われわれは茲にも、読者の心理を細心に配慮せんとするパスカルの意図と努力とを、垣間見る思いを禁じえないのである。

さらにかかる配慮を裏附けるものは、11°章中の〔III〕の(二)の(b)に於いて掲げられた諸断章と、12°章中の〔III〕に示された諸断章を比較するとき、両者はともに人間存在の諸状況・諸状態を提示する企図のうちであり乍ら、双方の断章群はその具体的内容と事例の上から言って、直接同一のものと見做しうるものが無く、相互にみな異なるという事実である。以上によって、われわれは、パスカルがモンテーニュの『随想録』を内容的技術的に凌駕せんとする野心的意図を、その胸中に秘めていたのではないかという印象すら、感ぜしめられるのである。

13°《本性の墮落》

本章は、10°《A. P. R.》の章中の〔V〕において述べられた如く、宗教的倫理的実践の立場から、必然的に要請挿入されたものであるが、構成上三つの事項に分れる。

〔Ⅰ〕 《本性の墮落》の諸様相について。

パスカルによれば、人間本性の墮落のしるしは《いたるところに》partout (La. 130) 見出されるのであるが、本章では三つの様相が、主なるものとして掲げられている。これら三者は截然として区分しえられる如き特性ではなく、相互に連関しあっておることは、容易に洞察しうるところである。

(一)——《自己愛》amour-propre にかんするもの (La. 99-Br. 100(47), La. 141-Br. 455(65), La. 199-Br. 452(96), La. 463-Br. 583(220))。

(二)——《悪徳》vices にかんするもの (La. 166-Br. 359(87), La. 311-Br. 478(163), La. 714-Br. 103(339))。

(三)——反理性的行動にかんするもの (La. 132-Br. 439(56), La. 205-Br. 293(102))。

〔Ⅱ〕 本性墮落の諸原因について。

(一) 根本的原因について——これは聖書に基づく神学的説明におけるもので、原罪を原因と見做す周知の所説である。パスカルは、fr. La. 145-Br. 448(69)において、《〔ミトン〕は、本性が墮落しており、人間が道義に反しているのを、よく見ている。だが、なぜ人間がいつそう高く飛びかけりえないかを知らない。》と、友人ミトンを評しているが、この文中の《なぜ》pourquoi の理由は、ミトンが無信仰者であって、人間が神から離反していることに対して無知であるから、というのが、パスカルの言わんとする所に外ならない (次の(b)参照)。

扱てパスカルの説くところは、二個の事実によって示されている。(a) 父たる神からの離反——La. 127-Br. 414(51), La. 130-Br. 441(54), La. 301-Br. 426(154)。

(b) 子たる神からの離反——《イエス・キリストなしには、人間は悪徳と悲惨とのうちにいるほかない。……彼〔イエス・キリスト〕の外には、悪徳、悲惨、誤り、暗黒、死、絶望があるだけである。》(La. 601-Br. 546(280))、《理性の腐敗は、あんなにも多くの異なった、常軌を逸した風習によって現わされている。人間が自分自身のなかで、もはや生きないためには、真理〔イエス・キリスト〕が来なければならなかったのだ。》(La. 609-Br. 440(288))。

(二) 心理的原因——これは人性論的説明に属すると見做しうるもので、La. 164-Br. 457(85) 中に見られる。この断章において、パスカルは自己愛の発生理由にかんし、次のごとく述べている——《各人は各自にとって一つの全部である。なぜなら、彼が死ねば、彼にとって凡てのものは死ぬからである。ここからして各人はすべてのものにとって、全部であると思うようになる。自然はわれわれの立場から判断すべきでなく、それ自身によって判断すべきである。》

(三) 最後に特記すべきは、上出の(一)とも連関することであるが、本性の墮落腐敗の結果として、われわれの《不确实》と《悲惨》にもかかわらず、《真理》と《幸福》とを望まずにはいられないことの真因である。パスカルは、La. 125-Br. 437 (49) 中で、次のごとく書いている——《…われわれは真理と幸福を望まないわけにいかない。しかし、确实さにも幸福にも達することができない。／この欲求がわれわれに残されているのは、われわれを罰するためであると同時に、われわれが何処から墮ちたかを感じさせるためである。》と。この引用文中の《罰するため》 pour nous punir および《感じさせるため》 pour nous faire sentir は、明らかに目的因としての神の摂理を意味しており、茲にわれわれは神による救済意志を汲み取りうるのである。神はじつに人間をして、真理と幸福とへ導くために、悲惨と不确实さを人間にもたらしたのである。それゆえ、《イエス・キリストとともにおれば、人間は悪徳と悲惨とから免れる。》(La. 601-Br. 546(280))ことが、出来るのである。

以上のごとき根本的目的因としての、神の救済意志こそが、真理と幸福に到達しうるという、実践目的の実現の可能性の、理論的根拠をなすものである。そうして茲に——既述の実践的立場からする——13°章挿入の意義と必要とが、いっそう明確化したのである。

14°《至 福》

[1] 普通の人々と哲学者たちとの幸福観について。

(一) 普通の人々の場合——La. 143-Br. 109 (67), La. 150-Br. 456 (74), La. 151-Br. 258(74)。

(二) 哲学者たちの場合——La. 299-Br. 361, La. 304-Br. 363(157), La. 717-Br. 447(342)。

以上両者の幸福観を要約すれば、次の如くである——《真の善（福）の探求。／普通の人々は善を、財産や外的な幸福や少なくとも気晴らしのうちに置く。／哲学者たちは、すべてそれらのものの空しさを示し、彼らの置きうる場所に善を置いた。》(La. 305-Br. 462(158))。ところで、このfr.のタイトル——《真の善（福）の探求。》Recherche du vrai bienにより、われわれは、《至福》なるものの本質の問題が提起されたことを、知るのである。

〔Ⅱ〕 幸福観への批判。以上のごとき幸福観に対して、パスカルは次の如き批判を、示している——《第2部。／信仰のない人間は、真の善をも正義をも知ることが出来ないということ。》(La. 300-Br. 425), 《弱さ。／人々のあらゆる仕事は、富を得ようとするにある。それなのに、彼らは、その富を正当に所有しているということを示すに足るだけの資格を持つことが出来ないだろう。何故なら、彼らには人間の思いつきしかないのであって、その富をしっかりと所有するだけの力もないからである。……われわれは、真理についても、幸福についても、無能力である。》(La. 97-Br. 436 bis (415))。

〔Ⅲ〕 至福に到るべき人間のあり方。

(一) 人は自然なゆき方を取るべきである——La. 256-Br. 81(126), La. 304-Br. 363(157), La. 306-Br. 422(159)。La. 306は、《解放者に諸手を差し出すようになるために、真の善の無益な探求で倦ませられ、疲らせられるのは良いことである。》というものであるが、この文の内容は、人間の自然な態度の一つの場合であると、言いうる。なぜなら、無益な探求の果て、人はおのずから《解放者》へ救済を求めるようになるのであるから。

(二) 《正義に対する飢え》faim de la justice を、持つべきである——La. 725-Br. 264(350)。

(三) 真の本性・善・徳・宗教の一体性を知るべきである、即ち《神が唯一の善である》ことを、知るべきである——La. 37-Br. 442 (25), La. 302-Br. 544 (155)。

以上のうち、(一)についてわれわれは、留意すべき事が存する。それは1°《順

序》の章中（〔Ⅱ〕の(一)）において、パスカルの所謂《真の秩序》le véritable ordreなるものは、それが真のものであるかぎり、《naturel》であるということであった。今や《自然に》naturellementに振舞うべきことの深い意味が現わされようとしているのである——《精神は自然に信じ、意志は自然に愛する。それゆえ両者とも真実の[・]対象が無ければ、誤った対象に執着せざるを得ないのである。》（La. 256——強調点は論者）。以上により、いかにして《至福》に到達することが出来るか、という方法論の問題のおのづからなる提起と、この解決のための第一歩（基本的姿勢）が示され、より具体的なる方法（宗教的行法）の提示が予想されるのである。

15° 《哲学者たち》

本章は、14°《至福》の章中の〔Ⅰ〕の(一)における、「哲学者の場合」を詳細化、具体化したものである。

〔Ⅰ〕 哲学者一般への批判に関するもの。

パスカルは、《哲学者たち》philosophesの諸々の欠点を指摘し、かつこれに批判を加えている——(一)自己に無知なる人間に向っての自力主義の薦めの矛盾（La. 279-Br. (509)）。(二)哲学者の擬装的な自己中心主義（La. 280-Br. (463)）。(三)宗教的意味における《われわれの本能》notre instinctに反する道を主張する哲学者たち（La. 281-Br. 464）。(四)哲学者たちの邪欲（La. 283-Br. 461）。(五)人間の二つの本性に基づく動きにかんする無理解（La. 285-Br. 525(140)）。(六)靈魂の不死の問題に対する無関心（La. 288-Br. 220(143), La. 292-Br. 219(145)）。

〔Ⅱ〕 複数の学派及びこれにぞくする哲学者に対する批判——(一)独断論、懷疑論に関するもの（La. 287-Br. 395(142)）。(二)懷疑論者、ストア哲学者、無神論者への批判（La. 293-Br. 394(148)）。

〔Ⅲ〕 特定学派に対する批判。

(一) ストア学派にかんするもの——La. 278-Br. 466, La. 282-Br. 360, La. 284-Br. 350, La. 155-Br. 351(79), La. 286-Br. 465(141)。

(二) 懷疑論への批評——La. 294-Br. 391 (149), La. 295-Br. 432 (150), La. 296-Br. 51(151)。

〔Ⅳ〕 キリスト教と諸学説。 パスカルは、哲学者たちの所説を非難論難することに終止しているのではない。彼らの意見のうち、キリスト教に役立つものにも触れている——La. 292-Br. 219(143), La. 295-Br. 432(150)。前者においてはプラトンを、後者にあっては懐疑論を、役立つものとして挙げている。これらの事実は、パスカルの意図する神学が、他説を止揚超越せんとすることを窺わしめるものであり、われわれは茲にパスカル弁証法的一端に触れるのである。

〔Ⅴ〕 人間の悲惨と偉大の矛盾について。最後にわれわれが注目すべき重要事は、本章に属すべきものとして、断章 La. 285-Br. 525(140) が、存することである。同断章の必要部分のみを掲げれば、次の如くである——《自然から生じるのでなく、改俊から生じる卑下の動き、そこに留まるためでなく、偉大に到るための卑下の動きが、必要である。功德から生じるのでなく、恩恵から生じる偉大の動き、しかも卑下を通過した後の偉大の動きが、必要である。》この引用文の部分が、自力主義を否定して、他力信仰へ赴くべきことを主旨とするものであることは、われわれにとって明らかであると、言えよう。

扱てわれわれはここで、《アポロジ》の大筋を解明するため、後来の章中の二断章をも勘考して、この問題に関するパスカルの所説を追究してみたい。二断章とは、次の如くである——《相反のみなもと。十字架で死ぬまでへりくだった神。自分の死によって、死にうち勝ったメシア。イエス・キリストにおける二つの本性、二つの来臨、人間の本性の二つの状態。》(19°《宗教の基礎と反論への回答》の章中における La. 448-Br. 765——強調点は論者)、《神の子が人となられたこと(受肉)は、人間が必要とした救いの偉大さによって、人間の悲惨の大いなることを人に示すものである。》(20°《キリスト教の道徳》の章中のLa. 668-Br. 526)。

以上により、《第1部》以来の人間本性の《偉大》と《悲惨》にかんする問題の解決が提示されるのであるが、われわれは、パスカルの解決のための叙述の仕方が La. 125 (13°章) → La. 285 (15°章) → La. 448 (19°章) → La. 686 (20°章) と、漸次明確化してゆくこと、換言すれば彼の所謂《漸層法》の手法を、ここにも明瞭に把握しうるるのである(漸層法については、VII回のIII参照)。す

なわち、この四断章 (La. 125~La. 668) を中心として既出の章中の諸断章を総合することによって、人間本性の矛盾の理由を明らかにしうるのである。

神は人間の原罪に対して刑罰を課し、その結果として人間の悲惨という状態が生起した。しかし神の意図するところは、人間をたんに悲惨の裡に放置することではなく、彼の悲惨を彼自身に意識せしめることである。なぜなら、人間は自己の惨めさを自覚することによって、真に惨めとなるからである (La. 129 Br. 399 (53))。だが神が人間の悲惨を彼自身に意識せしめるのは、彼をたんに絶望の淵に落とし入れる為めではなく、この悲惨の自覚を媒介して、神の許へ立ち返らせようとする為めである (La. 125, Br. 285)。そうしてこの「神の許へ立ち返らせようとする」神自身の意図の実現が、まさにイエス・キリストの《来臨》avènement (La. 448) に外ならないのである。以上が、人間本性の《悲惨》と《偉大》の矛盾にかんするパスカルの神学的理論的説明である。これにより、叙上の矛盾 (対立) という《現象の理由》が、はっきりと提示されたのである。

扱てわれわれは、再び La. 285 の叙するところを考察して見よう。この fr. 中の《功德から生じるのではなく、恩恵から生じる偉大の動き、しかも卑下を通過したのちの偉大の動き》des mouvements de grandeur, non de mérite, mais de grâce, et après avoir passé par la bassesse こそは、人間の偉大と悲惨が、弁証法的整合性をもって、矛盾の統一 (自己否定を媒介する自己肯定としての自己高揚) が行われていることを、示すものである。

これは人間の側における弁証法的内的運動であるが、これを神の側から見れば、人間の悲惨は神による人間存在の否定 (刑罰) であり、人間の偉大とは、——既出の La. 125 および La. 285 に見られる如く——「神の許へ立ち返らせようとする」神の意図 (恩寵) に応じうること (神の信仰) の根源的可能性としての偉大さである。神は神の許へ立ち返りうるように、人間を創造しかつ導いておるのである。この限り、神は人間を肯定 (救済) するものであり、全体として、神は人間存在を否定しかつ肯定するものである。即ち神は否定を媒介して人間を肯定せんとするものであり、これはまさに神の弁証法的活動 (刑罰と恩寵の矛盾の統一) に外ならないのである。

かようにして人間本性の偉大と悲惨の神学的理論的説明は、パスカル弁証法の論理¹⁾によって貫徹されているのであり、彼の宗教経験²⁾と犀利なる人性洞察および彼の深い思索を、その成立の土台としているのである。

- 1) パスカルの弁証法については、なお拙論「パスカルの説得術と思考法について」(駒沢大学外国語部研究紀要, 第1号)を参照のこと。
- 2) 彼の宗教経験を書き記した覚え書 *le Mémorial* 中には、《人間の魂の偉大さ。》*Grandeur de l'âme humaine.* という語句が、存する——J. Chevalier. *OEuvres complètes de Pascal*, Paris, 1954. p. 554。

16° 《他宗教の虚偽》

パスカルは本章において、キリスト教以外の宗教、諸学派の諸論、キリスト教分派の所説を批判するとともに、これらに即して或はこれらの諸説と比較して、キリスト教の特徴を明らかにすることに努めている。而してキリスト教の特色を、読者に対して説明する際の視点としては、人間の側から神の方へ向う立場からの論述となっている。言い換えれば、人間理性の視点からする、神学的考察および人性論的考察と、人間実存の本来的立場における信仰告白とが、叙述内容を構成している。

〔I〕 マホメット教への批判——La. 397-ar. 595, La. 401-Br. 597, La. 403-Br. 599, La. 412-Br. 598。このうち一例として、La. 401を挙げると、次の様である——《マホメットへの反駁。／『コーラン』がマホメットのものであることは、福音書が聖マタイのものであること以上に確かではない。なぜなら、福音書は多くの著者たちにより幾世紀にわたって引用され、その敵であるケルソスやポルフュリオスさえ、それを否認しなかったからである。……》。

〔II〕 哲学諸派の所説とキリスト教との比較——La. 402-Br. 435。この fr. の主旨とするところは、《二つの悪徳》*deux vices*——《高慢》*orgueil* と、《怠惰》 *paresse* または《絶望》*désespoir*——を癒しうるのは、キリスト教のみで、他の学派(ストマ派, エピクロス派, 独断論, アカデメイア派, etc.)には出来ないことであると、いうにある。

〔Ⅲ〕 他宗教一般とキリスト教との比較——La. 398-Br. 592, La. 413-Br. 251, La. 414-Br. 468, La. 418-Br. 492(199)。これら諸断章の要旨を示す部分のみを掲示すれば、次の如くである——《他宗教の虚偽。／彼らは証人を持たない。この人々〔ユダヤ人〕は持っている。……》(La. 398), 《他の宗教, 例えば異教などは, いっそう民衆的である。なぜなら, それらの宗教は外的なものなかに存するからである。だが, それは知識人には向かない。純粹に知的な宗教は, 知識人にはいっそう釣り合っているだろうが, 民衆には役立たないであろう。ひとりキリスト教だけは, 外的なものとの内的なものとの混ざ合わされているので, すべての人に釣り合っている。……》(La. 413), 《他の宗教は一つとして, 自分を憎むべきことを提唱しなかった。だから, 他の宗教は自分を憎んで真に愛すべき存在を求めている人々の心にかなうことはできない。……》(La. 414)。

〔Ⅳ〕 真の宗教の特色。

(一) 神学的及び人性論的説明——La. 399-Br. 489, Lr. 400-Br. 235, La. 404-Br. 451, La. 405-Br. 453, Lr. 406-Br. 528, La. 408-Br. 491, La. 409-Br. 433, La. 410-Br. 493, La. 411-Br. 650, La. 308-Br. 488(161), La. 417-Br. 479(198), La. 420-Br. 259(201), La. 422-Br. 487(203), La. 472-Br. 285(229)。これらのうち, 次の諸断章については, 若干の説明を要する。

(二) La. 399-Br. 489——《もしすべてのものの唯一の本源があり, すべてのものの唯一の目的があるならば, ——すべてのものはそれにより, すべてのものはそのためにある——したがって, 真の宗教はわれわれにそれを崇め, それのみを愛すべきことを教えなければならない。しかも, われわれは自分の知らないものを崇めることも, 自分以外のものを愛することもできないのであるから, これらの義務を教える宗教は, これらの無力をも教え, その救治法をも示してくれるはずである。それは一人の人によって, すべてが失われ, 神とわれわれとのつながりが破壊されたこと, 一人の人によって, そのつながりが回復されたことを, われわれに教える。……》。この fr. は, 神学的立場からする理論的追究を示す, 本章における代表例である。即ちここでは, 推論によって, 人間から神へと向う方途の規範——《真の宗教》la vraie religion の基本的あ

り方を、規定している。これは、次章(17°《愛すべき宗教》)と視点上大いに異なるものである。この意義はやがて、後来の章中において明らかにされるであろう。

(二) La. 400-Br. 235——《「彼らは事実を見たが、原因を見なかった」》。この短断章は、アウグスティヌスの作たる『ペラギウス反論』からの引用であり、文中の《原因》とは、La. 399中の《自分の知らないもの》*ce que nous ne connaissons pas* に相当するものであって、神を指すことは言うまでもない。要旨は、ペラギウスの信仰が自力的であり、真の宗教は他力的立場に立つものでなければならないということに存する。

(三) La. 404-Br. 451——《すべての人は生来たがいに憎みあうものである。人は邪欲を公共の福利に役立たせようとして、できるだけ用いた。だが、それは見せかけにすぎない、愛の虚像にすぎない。なぜなら、実のところ、それは憎しみに外ならないのだから。》この断章の内容は、他宗教の虚偽とも真の宗教のあり方とも、一見無関係のように見えるが、パスカルがこの fr. で説かんとすることは、《公共の福利》に見られる一般人の愛も、《愛の虚像》*une fausse image de la charité* にすぎないのであって、真実の《charité》とは、人の愛としては、真の宗教を信ずる信仰者の愛以外にありえないということであると、見られる。

17°《愛すべき宗教》

この章は、その構成上二つの部分から成っている。

[1] La. 423-Br. 774, La. 424-Br. 747, La. 318-Br. 769 (170), La. 426-Br. 780 (205) について。この四個の断章の主要部分は、それぞれ次の如くである——《すべての人のためのイエス・キリスト、一民族のためのモーセ。……「異邦人を照らす光」……イエス・キリストは、すべての人のために十字架の供え物をささげられた。》(La. 423), 《……異教徒には、贖い主は存在しない。彼らはそんなものを望みもしないからだ。ユダヤ人にも、贖い主は存在しない。彼らはむなしくそれを望んでいる。贖い主はキリスト者のためにのみ存在する。……》(La. 424), 《異教徒たちの回心は、ただメシアの恩恵が現われるまで保

留されていた。……》(La. 318), 《イエス・キリストは、聞かずに罪を定めたことはなかった。……》(La. 426)。

最初の La. 423 の主旨は、《すべての人のためのイエス・キリスト》Jésus-Christ pour tous にあることは、言うまでもない。次の La. 424 の言わんとするところは、《贖い主はキリスト者のためにのみ存在する。》Il n'y a de Rédempteur que pour les Chrétiens. という文の意味するところに存する。La. 318 の要旨も、同前である。何故なら、《異教徒たち》païens がキリスト教によって教化される為めには、それに先き立って贖い主たるイエス・キリストが来臨しなければならないからである。最後の断章 (La. 426) は、本人の言い分を聞かないで、即ち本人に対して実情を確かめないで、その人の行為を罰する遣り方に対するイエスの態度を、示したものである。言い換えれば、ユダヤ律法の形式主義的尊重を否定するイエスの愛の立場を述べたものに外ならない。

以上を概観するとき、イエス・キリストの来臨が、異教徒・ユダヤ人・キリスト者たち、要するに万人の罪を贖うことによって、全人類を救済せんとする、神の愛の立場からなされたものであることは、われわれにとって容易に了解しうるところである。

〔Ⅱ〕 La. 427-Br. 450 (206) の主旨は、次の文中にこれを見出すことが出来る——《もし人が、尊大と野心と邪欲と弱さと悲惨と不正とに自分が満ちていることを知らなかったら、彼はよほどの盲人である。……そうだとしたら、人は人間の欠点をかくもよく知っている宗教を尊敬するほかに、またそれに対してかくも望ましい救治法を約束する宗教の真理を求めるほかに、何をなしえるであろうか。》この文章は、究極のところ、キリスト教が《尊敬》estime に価するもの、また《望ましい救治法を約束する宗教》une religion qui y promet des remèdes si souhaitables であること、したがって必然的にわれわれ人間にとって、《愛すべき宗教》la religion aimable であることを、明らかに示している。

〔Ⅲ〕 《真の宗教》と《愛すべき宗教》とにかんする叙述上の視点の差異について。

前章における《真の宗教》は、《他宗教の虚偽》と対比して究明されていたが、その際究明は、人間の側から神の方へと向う視線に沿って論じられていた。

しかし《愛すべき宗教》にあっては、前章とは逆に、神の側から人間へと向う視点から叙述が展開している。即ち神の《愛》の発現たるイエス・キリストの来臨が、中心的位置を占めている。ここに視点の転換が明白に行われており、キリスト教が神によって、《愛すべき》aimable ものである所以が、明示されているのである。かくて《愛すべき宗教》としてのキリスト教は、人間のみならず神によって《aimable》という二重の意味において語られており、叙上の視点の転換は、漸て次章（18°《理性の服従と利用》）の内容に、おのづから通じて来るのである。なぜなら、神の《愛》は非論理的超理性的であり（8°章末尾参照）、また神が《隠れた》神である（La. 309-Br. 430）点からしても、超自然的超理性的であるからして、従ってこれを反映する神の宗教たるキリスト教は、超理性的側面を有し、人間理性の合理主義的理解にとって不可解の要素が、存するからである。

扱てわれわれは、再び断章 La. 427 に戻らなければならない。この断章中の《かくも望ましい救治法を約束する宗教の真理》なる文句は、本章にいたるすべての章を勘考するとき、極めて意義深いものがあると、言わざるを得ないのである。《救治法》des remèdes が、人間の悲惨と高慢から、彼を救済する方途を意味するのみならず、人間の偉大と悲惨の矛盾の究明という理論的問題の解決をも提示し得ることを、意味上内含すると、おもわれるからである。而して更にこれに留まらず、この文中における《宗教の真理》la vérité d'une religion とは、上述における本章と次の18°章との連関から類推して、かつまた文中に暗示される潜在的意図から見て、後来のすべての章の内容——理論上および実践上の宗教的重要問題の解決をも意味しているのであり、われわれは《愛すべき宗教》の章こそは、《アポロジー》における理論的問題と倫理的問題及びこれらの部分的解決の流れを集約し、而してこれら諸問題の全面的解決を目指す流れが流出する、全章中の重要な中継地点と見做しうるのである。

18° 《理性の服従と利用》

〔I〕 宗教の特性としての自然性・合理性と、超自然性（神秘性）・超合理性について。《信仰はなるほど感覚の言わないことを言うが、しかし感覚の見る

ところと反対のことを言うのではない。それは感覚の見るところと反対の事を言うのではない。それは感覚よりも上にあるのであって、反対ではない。》(La. 370-Br. 265)。かように信仰なるものは、《感覚よりも上にあるのであって、反対ではない。》Elle [la foi] est au-dessus et non pas contre のである。それゆえ、《感覚よりも上にある》かぎり、宗教的信は超自然的であるが、《反対ではない》点において、それは自然的なものと、言いうるのである。キリスト教の神秘性・合理性については、La. 358-Br. 273 がこれを示している——《もしすべてを理性に従わせるならば、われわれの宗教には神秘的、超自然的なものが何もなくなるだろう。／もし理性の原理に反するならば、われわれの宗教は不条理で、笑うべきものとなる。》

断章 La. 360-Br. 563 は、理性の立場からキリスト教を非難する無信仰者に対して、次の如き批判を呈している——《地獄に落される者の狼狽の一つは、彼らがキリスト教を罪に定めるために用いようとしたまさにその同じ理性(由)で、自分が罪に定められるのを見ることであろう。》この断章は、合理主義者たる無神論者が、理性による神の否定のゆえに、神の裁きによる刑罰のため、《地獄に落される者》les damnés となることを示しているが、神によって罰せられる理性とは、じつは誤れる理性であり、真実の理性は自己を超えたものを承認するところのものであるという思想が、この断章の背後に存することは、既に上に掲げられた断章および後述するところによって、明らかである。即ちこの断章 (La. 360) は、表面上宗教の超合理性を示すものではあるが、しかし決してこれに尽きるものとするべきではないであろう。

〔Ⅱ〕 宗教の超自然性及び超合理を示すものに就いて。キリスト教における超自然性を示す実例は、次のごとくである——(一)《聖餐》l'Eucharistie (La. 353-Br. 224)。 (二)《奇蹟》les miracles (La. 354-Br. 812, La. 365-Br. 838, La. 369-Br. 811)。 (三)《原罪》le péché originel (La. 323-Br. 445 (175), La. 325-Br. 230 (177))。このうち《奇蹟》について、パスカルは、次のように述べている——《奇蹟がなかったなら、人はイエス・キリストを信じなくとも、罪を犯すことはならなかったであろう。》(La. 369), 《イエス・キリストは奇蹟を行なわれた。ついで使徒たちも初代の聖徒たちも多数の奇蹟を行なった。それは預

言が未だ成就せず、彼らによって成就されつつあったので、奇蹟のほか証拠になるものが無かったからである。メシアが諸国民を回心させるであろうことは、預言されていた。……今やユダヤ人に対して、その必要はない。成就した預言は、一つの永続的な奇蹟だからである。》(La. 365)。

〔Ⅲ〕 宗教の超合理性に基づく人間理性の先天的限界にかんする理性の自己認識の意義、及び理性に対する批判と評価について。

(一) 理性の自己認識の意義——《理性の服従と行使、そこに真のキリスト教がある。》(La. 352-Br. 269), 《理性の最後の歩みは、理性を超えるものが無限にあるということ、認めることにある。それを知るところまで行かなければ、理性は弱いものでしかない。……》(La. 369-Br. 811)。

(二) 理性に対する批判と評価——《聖アウグスティヌス。理性というものは、自分が従わなければならない場合があるということ、自分で判断しないかぎり、決して従わないであろう。だから理性が、自分が従わなければならないと判断した時に従うのは、正しいことである。》(La. 935-Br. 270), 《反対(矛盾)があるということは、真理を見分けるよいしるしではない。／多くの確かなことが反対されている。／多くの嘘が、反対なしにまかり通っている。／反対のあることが嘘のしるしでもなければ、反対のないことが真理のしるしでもない。》(La. 362-Br. 384)。以下この分類項目に属するものとしては、次の諸断章が存する——La. 367-Br. 272, La. 368-Br. 253, La. 373-Br. 267, La. 377-Br. 345 (190)。

〔Ⅳ〕 宗教的認識能力と信仰への道について。(一)宗教的認識能力——La. 357-Br. 185, La. 224-Br. 277(107), La. 225-Br. 278(108), La. 375-Br. 99(188)。これらのうち、代表的なものとして、La. 357を挙げる事が出来る——《すべてのことを円滑に処理なさる神の導きは、宗教を、精神のなかへは理性によって、心情のなかには恩恵によってお入れになる。……》この引用文により、われわれは、《理性》raison および《心情》cœur が宗教的認識能力として、パスカルによって認められていたことが、分るのである。

(二) 信仰への道——(a)理性の《服従》soumission の必要性 (La. 355-Br. 268)。(b)真理を愛すべきであるということ (La. 361-Br. 261)。(c)心の渇きを以って

真理を求め、聖書を調べること (La. 356-Br. 696)。(d)宗教の真理を納得する方法 (La. 378-Br. 561 (191))。(e)信じる基準について (La. 374-Br. 260 (187))。(f)《習慣》coutume の重視 (La. 7-Br. 252 (7)), La. 396-Br. 245 (195))。

〔V〕 キリスト教的信仰に対する種々の態度。《……異教徒には、贖い主は存在しない。彼らはそんなものを望みもしないからだ。ユダヤ人にも、贖い主は存在しない。彼らは空しくそれを望んでいる。贖い主はキリスト者のためにのみ存在する。》(La. 363-Br. 747 bis), 《真のキリスト者は少ない。信仰についてさえそうだと、私は言う。信じている人々は沢山あるが、迷信によってである。信じない人たちも沢山あるが、不信心によってである。両者の中間にあるものは、少ない。……》(La. 364-Br. 256), 《信仰は迷信とは違う。／信仰を迷信になるまで固執することは、それを破壊することである。……聖体が目に見えて認められないという理由で、それを信じない不信仰。……》(La. 366-Br. 255), 《あまり従順すぎるということで、人々を責めなければならない場合も、珍しくない。／それは、不信仰と同様に、自然な悪徳で、同じように危険である。／迷信。》(La. 372-Br. 254), 《真理を愛さない人たちは、それに異論があると否定するものが多いとかいうことを、口実にする。だから、彼らの誤りは、彼らが真理または愛を好まない所から来るのであって、したがってそれは言い訳にはならない。》(La. 361-Br. 261)。

〔VI〕 布教の仕方について。この分類項目にぞくする fr. としては、La. 140-Br. 186 (64), La. 7-Br. 252 (7), La. 357-Br. 185, La. 371-Br. 947 が存するが、本章においてパスカルが説かんとするところは、要するに暴力を用いて人を宗教へ導くべきではなく、《習慣》の助けを借りて説得すべきものだ、というにある——《……ところが、それ〔宗教〕を精神と心情のなかへ、力とおどかしとによって入れようとするのは、そこへ宗教を入れるのではなく、恐怖を入れるものである。……》(La. 357-Br. 185), 《……われわれはもっと容易な信仰、すなわち、慣習による信仰を獲得しなければならないのであって、それはわれわれを、無理強いなしに、技巧なしに、論議なしに物事を信じるようにさせ、われわれの全能力をそれに傾けさせ、そのようにしてわれわれの魂が自然にそこに落ち込むようにするのである。》(La. 7-Br. 252 (7))。

10°章以降の論述の経過について。

〔I〕 10°《A. P. R.》の章は、内容的には《アポロジ》の《第2部》のダイジェストであり、《第2部》の章順序（前半の）を示している。この章にあっては、《第1部》における人間存在の悲惨と偉大との矛盾の提示、およびこの《現象の理由》を追究すべき問題が、提起されている。ここでわれわれが留意しなければならないことは、《第2部》のダイジェストであるとはいえ、《第2部》の内容を提示する以上、予めその内容を読者の前に展開することは、読者の興味を多かれ少かれ減殺することであり、これはパスカルの手法たる《gradation》による諸者の関心の持続・高揚と矛盾することである。

しかしパスカルは、重要かつ興味ある《宗教の証拠》については触れることなく、これを暗示するに留めて、却って読者の興味への刺戟を図っている。なお附言すべきとは、彼が本章で意図したことは、《宗教の証拠》、特に神の存在の証明を中核とする《アポロジ》が、《Apologie (à ou de) Port-Royal》である、という事の宣揚である（拙論 XI 回参照）。このことが、神の存在の証明に関心を有する当時の知識層およびポール・ロワイヤル派に対立するイエズス会に対して、多かれ少かれ反響を呼ぶであろうことを、パスカルおよびポール・ロワイヤルの人々は、当然予想していたとおもわれるのである。

〔II〕 11°《始め》の章は、無信仰者を神へと導く予備的段階である、即ち彼らの理性・心情に訴える実例ならびに人間存在の諸状況の提示等が、行われている。

〔III〕 12°《人間を知ることから神への移行》の章は、前章の企図を引き継ぎ、レトリックの技術を駆使して、神の信仰への教導を強化している。

〔IV〕 13°《本性の墮落》の章は、11°・12°両章の意図を、更に具体化し詳細化する作業であり、この作業は一応14°章→15°章→16°章→17°章と経過し、18°章に迄達するのである（神への教導を広く解すれば、29°《結論》の章に到る全章を含むことになる）。本章はかかる作業の一環として、本性の墮落の結果としての《悲惨》からの脱出を誘致し、かつ脱出の可能性即ち救済の可能性の原理的根拠を提示しつつ、換言すれば神の信仰によって救われることを

保証しつつ、《至福》の追求および研究の端緒たらしとするものである。

[V] 14°《至福》の章は、前章における問題意識の継続の下に、(一)《至福》(最高善)とは如何なるものであり、また如何なるものであるべきかという《至福》の本質論、換言すれば神学的倫理的かつ人性論的なる幸福論にかんする問題提起であり、かつまた(二)如何にして《至福》を実現するか、という実践的方法論的問題の提示である。——(一)の問題提起は、本章中の[I]の(二)のLa. 305-Br. 462において行われ、本質論の一部が本章において論ぜられている。而してその解決は、20°《キリスト教の道德》および29°《結論》の両章において、これが示されている。

(二)の方法論についても、その一部が本章にあって述べられおり、具体的方法は18°《理性の服従と利用》の章中の[N]において、提示されている。

[VI] 15°《哲学者たち》の章は、14°章における哲学者たちの幸福観に対する批判の延長としての、彼らの思想・あり方の批判であり、彼らの説くところに従っても、真の幸福(至福)には到りえないことを、要旨としている。次にこの章の重要点は、《第1部》以来の問題——人間本性の偉大と悲惨の矛盾という理論的問題に対する解決(かかる矛盾対立の現象の理由)が、提示されているということである(15°章の[V])。

[VII] 16°《他宗教の虚偽》の章は、言う迄もなく、キリスト教以外の諸宗教は、至福を実現し得ないということを、主旨とするものである。而して本章にあっては、真の宗教なるものの特色が論じられており、次章(17°)の《愛すべき宗教》の内容と合わせて、キリスト教の特性のアウトラインを描き出している。

[VIII] 17°《愛すべき宗教》の章は、真の宗教の究明に当って、神の側から人間へ方向においてこれを論じており、逆の方向即ち人間の側から神の方へと向う視点から論じておるところの、前章(16°)中の「真の宗教の特色なるもの」の論究とは、趣を異にしている。すなわち神の愛の超自然性・超合理性が、キリスト教の超合理性を形成し、そうしてこれこそが、《理性の服従と利用》(次章)の基礎となるのである。

[IX] 18°《理性の服従と利用》の章は、真の宗教たるキリスト教の特徴を、

より具体的に提示している——自然性・合理性と超自然性・超合理性（神秘性）として。そうしてこの超合理性こそが、理性的認識の限界を示すものであり、宗教を合理主義的にのみ理解しようとする態度を、パスカルは否定するが、しかし理性は、自己以上のものが無限にあることを自ら認識しうる点で、評価できるものであり、かつ信仰への道において、真の宗教にも役立つところのものである（本章の〔Ⅳ〕参照）。言い換えれば、パスカルの《アポロジ》そのものも、理性による理解を前提としており、ここに理性活動の存在理由（宗教にとっての）の一部が、存するのである。とはいえ、パスカルは彼の所謂《宗教の証拠》*Preuves de la religion*（La. 38-Br. 290のタイトル。事実上20°～28°章の内容が、これに相当する）の効果を過大視することは、決してしていないのである（19°《結論》の章参照）。これは、実に彼自身の宗教経験そのもの由来しており、彼の体験を記した《覚え書》*le Mémorial*中に、理性的立場に立つ哲学者や学者たちの所謂神なるものを否定するという形で、現出しておるところである——《FEU/Dieu d'Abraham, Dieu d'Isac, Dieu de Jacob,/non des Philosophes et des savants,》（J. Chevalier, *Œuvres complètes de Pascal*, Paris, 1954, p. 554）。

以上において、基本的誘導ないし教導を終了したパスカルの論述は、いよいよ《宗教の証拠》の序曲とも言うべき次章19°《宗教の基礎と反論への回答》中の《宗教の基礎》*Fondements de la religion*へと進むのである。

(XXI 回了)